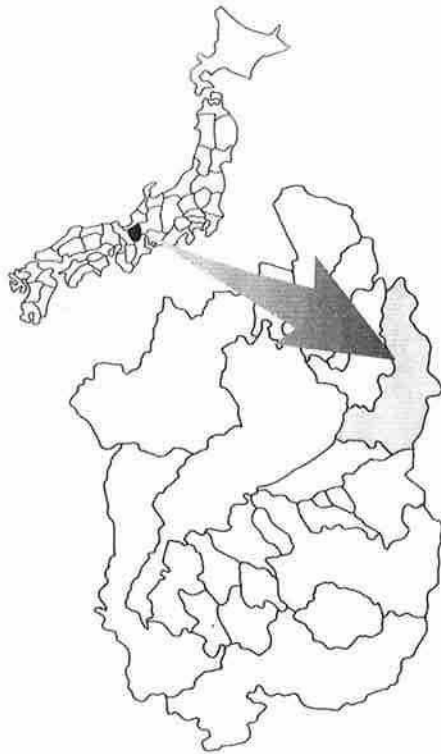


ばん おもて  
番の面遺跡分布調査報告書

—縄文時代中期の表採遺物—



2008. 3

米原市教育委員会

## 序

米原市は、平成17年に滋賀県坂田郡山東町・伊吹町・米原町・近江町が合併して誕生しました。

市域はおおよそ律令によって定められた近江国坂田郡に相当し、北近江の大河姉川や天野川の源流をなす伊吹・霊仙の両山系から、琵琶湖沿岸まで広がります。近江の最高峰伊吹山をはじめとした山の恵みを背後にひかえ、母なるみずうみ琵琶湖の恵みを眼前にしたこの地では、県内でも最も早く、縄文時代の早期から今日まで営々と人々の暮らしが続いていたことが、これまでの発掘調査でわかってきました。

とくに縄文時代には、姉川上流山間部の台地上、伊吹山麓の扇状地、湖岸地域、森と内湖にはさまれた砂州など、市内のさまざまな地域で縄文遺跡が確認されており、その質と量は県下屈指の密度を誇ります。

さて、本書は米原市梓河内および柏原に所在する市指定史跡「番の面遺跡」の資料を調査し、その結果をまとめたものです。番の面遺跡は、昭和30年に発掘調査され、近畿地方で初めて竪穴住居跡が見つかったことで一躍知られることになりました。また、出土した土器は「番の面式」という名称で、近畿地方における縄文中期の標式として設定されました。今回報告する資料は、土地所有者であり遺跡の発見者でもある故山根隆治氏が昭和30年以降採集し、大切に保管されてきたものです。そのおかげで散逸を免れ、再び世に出すことができました。

これもひとえに、現在の御当主である山根正晴氏のご理解とご協力のおかげと、深く感謝の意を表す次第です。最後になりましたが、この調査結果が、今後の縄文遺跡の研究の一助になれば幸甚です。

平成20年 3月25日

米原市教育委員会

教育長 瀬戸川 恒雄

## 例 言

1. 本書は、平成18・19年度において米原市教育委員会が実施した、米原市梓河内・柏原に所在する番の面遺跡の分布調査報告書である。
2. 本調査は、米原市指定史跡番の面遺跡において、土地所有者の山根正晴氏が所蔵されている地表面採集遺物の実測・写真撮影等をおこなったものである。
3. 調査体制は下記の通りである。

米原市教育委員会

教 育 長 瀬戸川恒雄

教 育 部 長 清水 克章

課 長 中井 均（平成18年度 文化スポーツ振興課）

〃 （平成19年度 まなび推進課）

課 長 補 佐 桂田 峰男

主 査 高橋 順之

3. 遺物の整理・実測等に関しては、的場育代がおこなった。
4. 遺物の写真撮影は、寿福写房の寿福滋氏を煩わせた。
5. 石器の石材鑑定については、八日市地学趣味の会会長・磯部敏雄氏に依頼した。
6. 本書の執筆・編集は高橋順之がおこなった。また、第3章については、小江慶雄「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」（京都学芸大学学报1956A：No.9）の概要を記した。
7. 調査記録は、米原市教育委員会で保管している。なお、遺物については山根正晴氏の所蔵である。

# 目 次

第1章 地理的環境と歴史的環境	1
第2章 調査の経過	3
第3章 昭和30年の発掘調査概要	4
第1節 調査の経過	4
第2節 遺 構	4
第3節 遺 物	6
第4節 考 察	7
第4章 調査の成果	9
第1節 石 器 類	9
第2節 土 器 類	11
第5章 調査のまとめ	17

## 挿図目次

第1図	番の面遺跡位置図	
第2図	北近江の主要縄文遺跡位置図	2
第3図	発掘地点実測図	5
第4図	竪穴住居跡実測図	5
第5図	石器類実測図	6
第6図	土器類実測図	8
第7図	石器の形態分類表	10
第8図	石器実測図1	21
第9図	石器実測図2	22
第10図	石器実測図3	23
第11図	石器実測図4	24
第12図	石器実測図5	25
第13図	石器・その他実測図	26
第14図	土器実測図	27

## 表目次

表1	石器観察表1	12
表2	石器観察表2	13
表3	石器観察表3	14
表4	石器観察表4	15
表5	石器観察表5	16
表6	形態別個数表	18
表7	I～VI類形態別計測表	18
表8	I～IV類形態別計測表	19
表9	I類形態別計測表	19

## 写真目次

写真1 企画展のようす ..... 3

## 図版目次

図版1 (1) 番の面遺跡遠景(東から)  
(2) 番の面遺跡遠景(西から)

図版2 (1) 遺跡直下の旧中山道  
(2) 番の面遺跡の現状

図版3 (1) 竪穴住居跡(昭和30年)  
(2) 発見石器(昭和30年)  
(3) 発見石器(昭和30年)

図版4 (1) 石器1  
(2) 石器2

図版5 (1) 石器3  
(2) 石器4

図版6 (1) 石器5  
(2) 石器6

図版7 (1) 石器7  
(2) 石器8

図版8 (1) 石器9  
(2) 石器10

図版9 (1) 石器・その他  
(2) 保管状況

図版10 (1) 土器1  
(2) 土器2

図版11 (1) 土器3  
(2) 土器4



第1図 番の面遺跡 位置図 (明治26年)

# 第1章 地理的環境と歴史的環境

## 地理的環境

番の面遺跡は、滋賀県米原市梓河内字黒谷と柏原字番の面にかかる、霊仙山（1084m）から延びる山丘端の標高180m、東西約350m、南北約150mの台地に立地している。台地は番の山とよばれ、現在は名神高速道路と国道21号線によって分断されている。

この地域は、旧坂田郡山東町（平成17年に坂田郡四町が合併して「米原市」となる）南部の柏原・梓河内の山地部一梓川および今須・長久寺・柏原の地峡部（関ヶ原地峡）で鈴鹿山地の北端にあたる。また、北に伊吹山（1377m）、西には清滝山（439m）をはじめ、300～400m級の孤立状山塊が点在しているために、耕作が可能な面積は限られている。

地理的にみると、古代美濃国との国境に接し、古代三関のひとつである不破関が至近距離にある。中山道を通り、不破の関をぬけた最初の宿場町が柏原である。一方、柏原は日本海地方、とくに越前に至る幹道である北国脇往還にも分岐する。西へは醒井をぬけて、琵琶湖岸の朝妻から湖上ルートを利用して畿内へ入る経路が考えられる。このように、この地域は、地形的条件には恵まれず、生産基盤は貧弱ではあるが、主要街道の門戸的な位置にあり、まさに、東西文化の接点として、文化導入の門戸、また政治上、あるいは戦略上、常に重要な位置を占めてきた。

さて、地質的に特筆すべき点がある。後述するとおり当遺跡で多量に採集されている石鏃や石屑のほとんどがチャートである。遺跡の近くに良質のチャート岩盤が露出しているという清滝山や松ヶ谷というところがあり、元禄13（1700）年の清滝村絵図の一画にも、梓村東側に露頭が描かれており「火打石」と記されている。とくに、近世から大正初期にかけて中山道の通行人に火打石として販売されていたという。良質の石材が近傍で得られたことが遺跡立地の重要な要因である。

## 歴史的環境

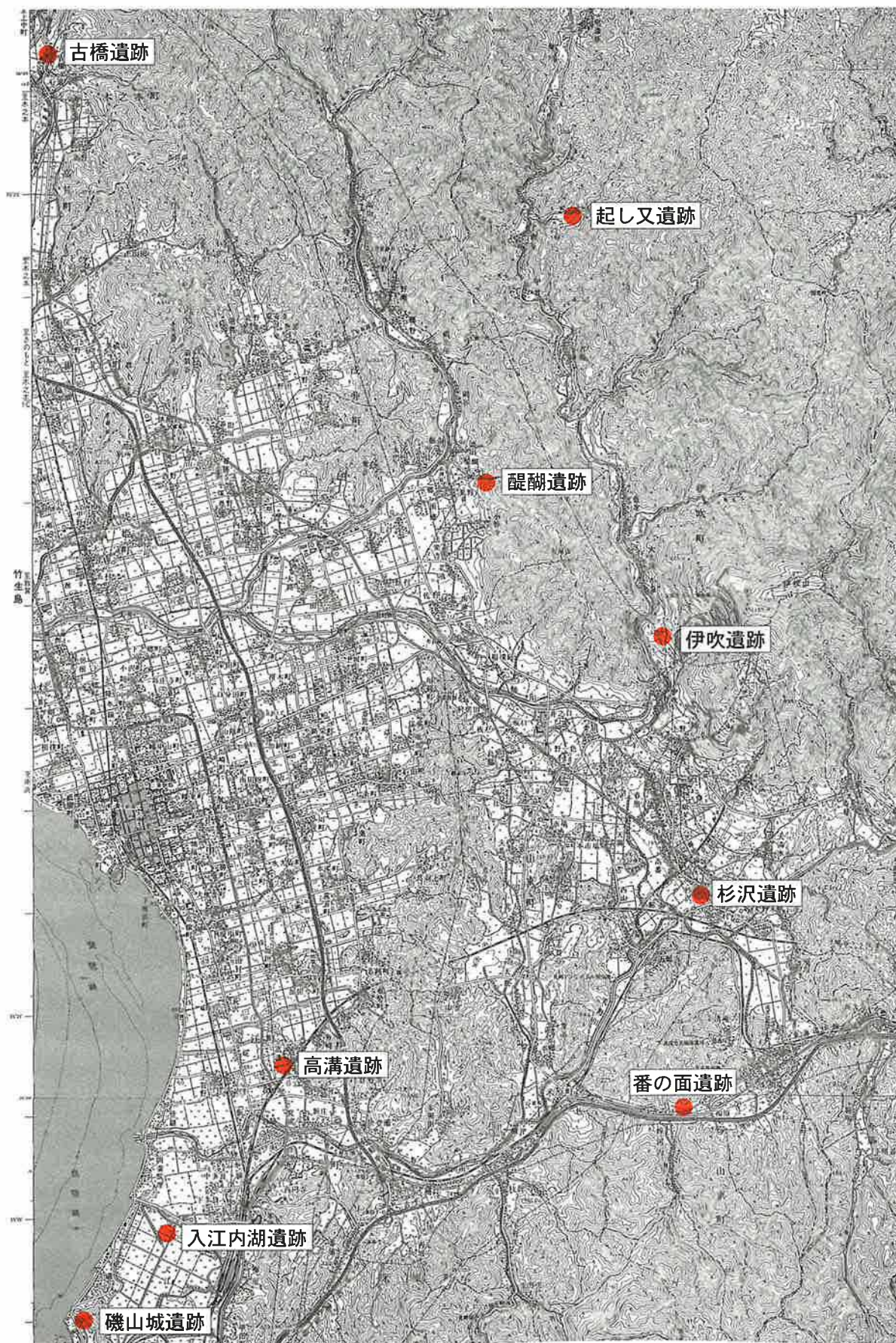
番の面遺跡は、出土した土器から縄文時代中期末頃に位置付けされ、近畿地方の縄文土器編年の標式遺跡になっていた。また、近畿地方で初めて縄文時代の竪穴住居跡が検出された学術的に極めて貴重な遺跡として知られている。

北近江の縄文時代は、早期の中葉頃から本格的に始まる。姉川上流山間部の米原市起し又遺跡（曲谷）でもごくわずかに押型文土器が見つかるが、早期から前期、中期前半までは、米原市磯山城遺跡（磯）・同高溝遺跡（高溝）・湖北町葛籠尾崎湖底遺跡（尾上）など、琵琶湖岸が生活の拠点である。しかし、中期中頃以降は、山麓や山間部もしくは内陸部で遺跡が多く発見されている。番の面遺跡をはじめ、米原市起し又遺跡・同伊吹遺跡（小泉）・長浜市醍醐遺跡（醍醐）・木之本町古橋遺跡（古橋）などがあげられる。気候の寒冷化による琵琶湖の水位変動とともに、トチなど堅果類の灰汁抜き技術確立による主食の確保などにより、山麓山中での生業活動が重視されたためと考えられる。

縄文時代中期後半とされる醍醐遺跡は、瀬戸内地方と関連の強い性格のものといわれているが、中期末の「咲畑・醍醐土器様式」は、近畿系の特徴と東海系の特徴を持つ土器が混在した内容になる。中期末の番の面遺跡でも、東日本的な色彩が濃くなると指摘されている。

晩期には、山麓で杉沢遺跡（杉沢）が栄えるものの、多くは湖岸の低湿地に活動の場を移した。





第2図 北近江の主要縄文遺跡位置図

## 第2章 調査の経過

番の面遺跡の発見は、昭和29（1954）年9月に梓河内の山根隆治氏が、所有する台地上の土地の一画を開墾中、縄文土器の破片30数個を採集したことに始まる。滋賀県立短期大学を経て京都大学考古学教室で破片の鑑定がおこなわれ、米原市杉沢在住の郷土史家樋口元氏の要請を受けた、京都学芸大学（現京都教育大学）史学研究室の小江慶雄教授が「湖国の縄文式文化の文化性を追求する上に逸することのできない新たな貴重資料」として、昭和30年7月に発掘調査がおこなわれた。このときの詳細については次章で概観したい。

平成18年4月、米原市伊吹山文化資料館（春照）において通算56回目の企画展『山と湖の縄文文化 一米原市のあけぼのー』が開催された。企画展では、昭和13年、北近江で初めての発掘調査で出土した杉沢遺跡の合せ口甕棺（長浜市立長浜城歴史博物館所蔵）のほかに、最新の成果として入江内湖遺跡（入江）の遺物などが出展されたが、いちばんの目玉は、個人所有としてその存在が一部の研究者に知られていた番の面遺跡の表採遺物であった。

山根隆治氏は、発掘調査のあとも畑で遺物を採集されるたびに家に持ち帰られ、大切に保管されてきた。採集品は幅125cm・高さ50cmの額内に、布と綿で緩衝材を作り、両端に土器を、中央に多数の石器を配置して客間に飾られていた。「縄文遺跡 昭和30年以降」とのタイトルがあり、整然と並んでいる真ん中とは別に、土器の間にも石鏃が貼り付けられていたことから、その都度拾われた遺物をご飯粒で固定されていたようだ。山根氏の石鏃を見る目は確かで、頭部や脚部が欠けているものの、318点のほとんどが製品としての石鏃であった。

米原市教育委員会では、企画展終了後に現在の山根家の御当主・正晴氏に依頼して、本資料の調査および報告書への記載許可をいただいた。調査は、伊吹山文化資料館において、平成18年6月から平成19年12月までおこなった。調査後、遺物は今回の分類順に並べて額に収納し、平成20年1月に返却した。



写真1 企画展のようす（遺物は左ケース内）

## 第3章 昭和30年の発掘調査概要

### 第1節 調査の経過

本章では、昭和30年の発掘調査に基づく小江慶雄教授の報告文「滋賀県番の面縄文式住居遺跡」（京都学芸大学学報1956A：No.9）の概要を記し、番の面遺跡の性格や当時の評価について紹介したい。

戦後、滋賀県の縄文遺跡の調査は、滋賀里遺跡・石山貝塚・安土弁天島遺跡など、おもに南近江において豊富な遺構・遺物が調査されていた。一方で小江慶雄教授（湖北町尾上のご出身）は、尾上湖底遺跡の再検討、昭和26・27年の醍醐遺跡（長浜市）の発掘調査をはじめ、古橋・川合（木之本町）、伊吹・杉沢（米原市）の踏査などから、「湖北の縄文式文化の類型的性質を把握」することに努められ、これらの遺跡が「畿内縄文式文化の北限を画しつつも東日本縄文式文化の最西端の一拠点形成する重要な遺跡群」であるとの認識を示された。このようななか、昭和29年に梓河内の山根隆治氏による番の面での遺跡発見があり、とくにすぐれた石鏃の産地として古くから知られていた伊吹山南西麓一帯における「確実な一拠点」との予察と、「従前の湖北の縄文式遺跡に対する知見の欠陥を補充する意味においても、本遺跡に対する調査の必要」を痛感された。

発掘調査は京都学芸大学史学研究室の事業として、昭和30年7月25日から31日までおこなわれた。調査には、地権者である山根氏をはじめ、地元の山沢茂氏、杉沢在住の郷土史家樋口元氏などの協力と、山東町当局の支援があった。

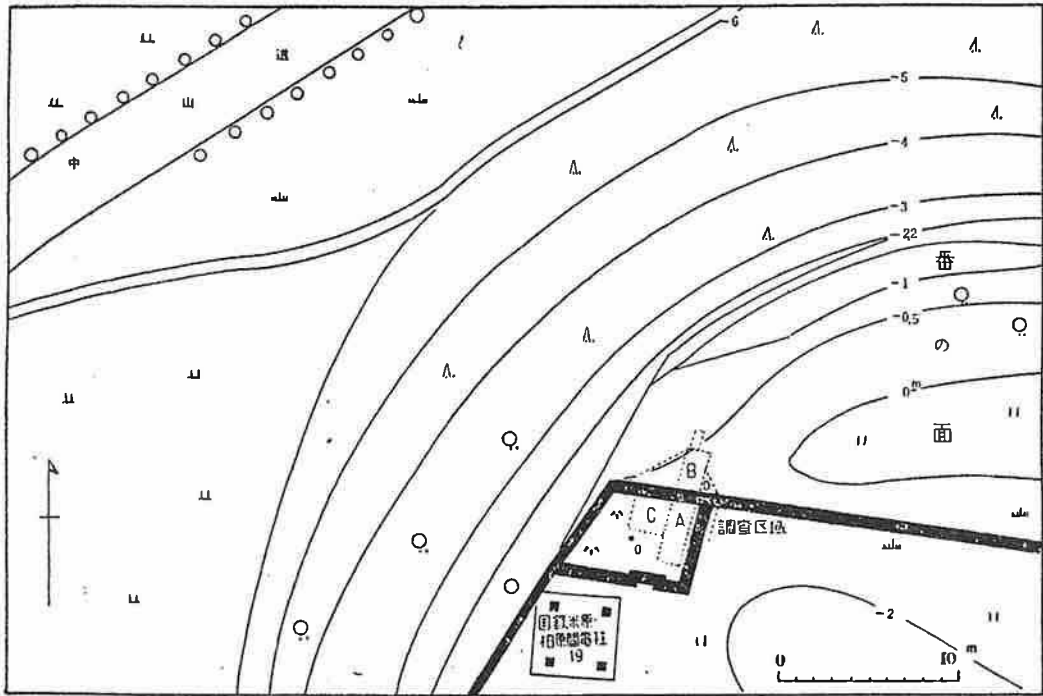
このときの調査の最も大きな成果は、近畿地方においてはじめて縄文時代の竪穴住居跡を検出したことである。「発見遺物に於いてさほど顕著な事例を認め得なかったが、それに反して縄文式の竪穴住居址一基の遺存することを確認した。（中略）幸いにも畿内縄文式文化研究の上に、特記すべき新知見を加えることになった」と述べられているとおり、一躍、番の面遺跡を有名にした。さらに、遺物についても「番の面式」という土器型式が設定されることになる。

### 第2節 遺構

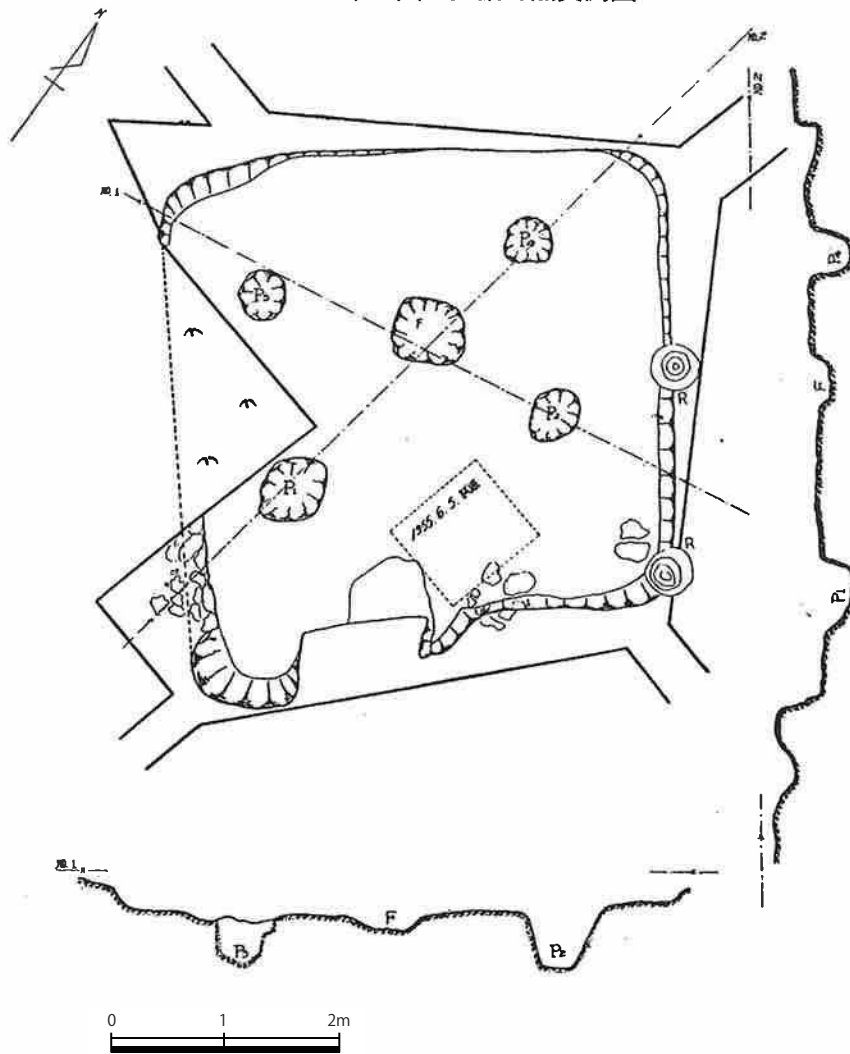
発掘調査区の設定は、石鏃・石屑の散布範囲や、排水溝の断面による包含遺物等の確認から、「遺跡の中核部が台地の西北隅即ち中山道寄りの台端に存することを察知」され、ここに南北6m、東西1.5mの調査区が設定された。最終的に調査区は、竪穴住居跡の検出で一部東西に拡張されている（第3図）。

#### 基本的層序

基本的層序は、開墾時の表土（約20cm）の下にある元の表土層（Ⅰ層：約30～45cm）、黒褐色砂質土層（Ⅱ層）、固い黄褐色粘土質土層（Ⅲ層）となる。Ⅱ層は石器や土器が堆積する遺物包含層であり、Ⅲ層が竪穴住居跡の検出された遺構面である。Ⅱ層は住居跡内では約30～50cm堆積し、遺物の包含も「深度を増すに応じて密度を加え、床面の上20cm内外に於いて特に著しかった」という。このⅡ層は、住居跡の周壁が立ち上がる遺構外ではⅠ層とⅢ層の接する境にわずかに遺物の包含が認められる程度に消滅する。



第3図 発掘地点実測図



第4図 竪穴住居跡実測図

### 竪穴住居跡（第4図）

調査範囲が狭いことから、検出された遺構は竪穴住居跡1基のみである。住居跡の床面は地表面（1層）から約80cm下で検出されている。平面形は不整形の隅丸方形で、対角線が概ね東西、南北の方向を指し、各辺の長さは東北辺3.75m、西北辺4.3m、東南辺4m、西南辺3.8m（推定）、南隅に張り出し部を設けていて出入口とされた。床面積は約16㎡であった。床面は概ね水平を保ち、南隅部のみやや上昇している。炉跡・柱穴・北西壁の不明瞭な周溝が検出されている。住居跡の主柱の位置を示す柱穴は4個の内柱式で、周壁から約50cm～1.3m離れた四隅に1個ずつ設けられているものの、全体にやや北西に偏り相互関係が十分に統一されていない。口径40～60cm、深さ35～60cmでいずれも円形垂直に穿たれた整ったものである。炉跡もやや北西に偏在し、平面は70×50cmの楕円形で深さ15cm、断面皿状の地床炉である。

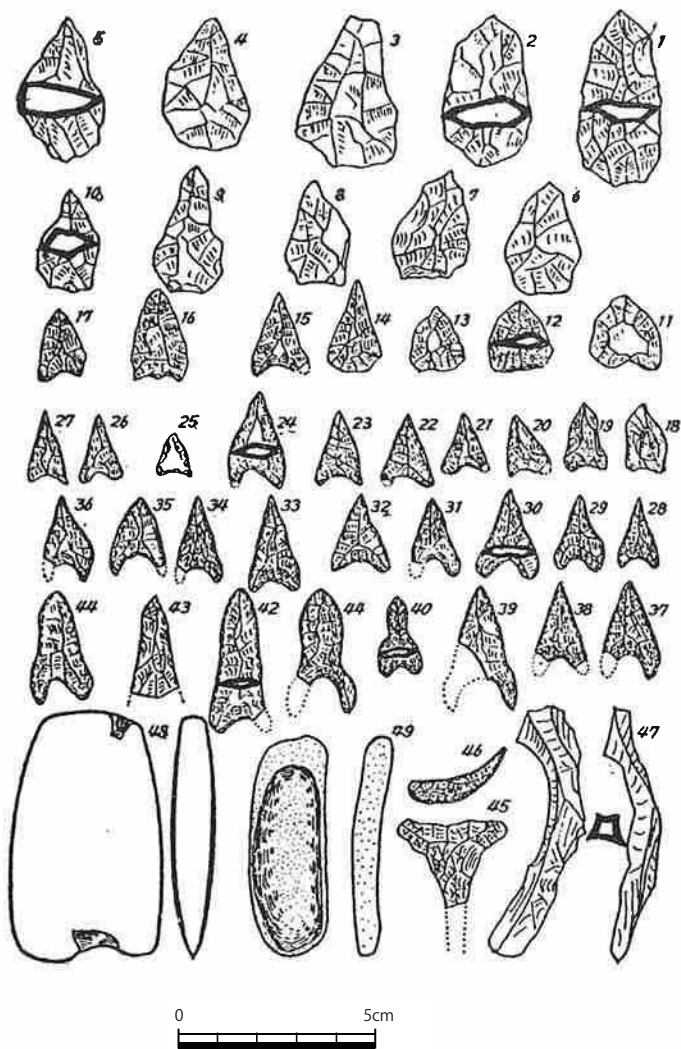
包含層中の土器と床面ないし柱穴内の土器の時期差について、「その距たりは決して両者の同存をさまたげる程度のものではない」として、番の面遺跡が短期間のみ営まれた遺跡である可能性を示唆されている。

### 第3節 遺物

#### 石器類（第5図）

打製石器は石鏃17点（山根氏表採遺物55点）・石錐1点・三日月状石器1点。磨製石器では石斧1点・小形砥石1点が出土している。石鏃は第4章で述べるとおり粗製大型の「a類（本報告ではVI類とした）」を除くと、b～fの5つに分類されている。住居跡床面で見つかった石斧は蛇紋岩製の精美な定角式石斧である。

調査では、包含層中全体からおびただしいチャートの石屑および未製品が採集されており、住居跡付近に製作場があったことが推考されている。なお、サヌカイト製の石鏃2・3点および、黒曜石の石屑3片（図版3-3下段真ん中の1点）が採集されている。



第5図 石器類実測図

## 土器類 (第6図)

土器は「単一の文化系統に属する縄文式土器に限られ」、「本遺跡は沈線文土器を出す単純遺跡」で、主体となる第Ⅰ・Ⅱ群土器は「琵琶湖地方縄文式文化中期末に属する形式に該当すると」とされた。Ⅰ・Ⅱ群の分類は、住居跡床面ないし柱穴出土と包含層出土の違いで近似する。口縁部文様帯が発達するのが特徴で、2条の沈線で区画された帯状文が小渦巻で4～6個に区画され、その一端が小突起を作り波状口縁となる。区画内は、円形竹管文やヘラ描き並行斜線を充填する。胴部は文様帯直下から2～3条の沈線が垂下し綾杉文を施す。中期後葉の醍醐遺跡では、口縁に隆帯文を持つものが併存するが、出土土器はすべて沈線文により統一されている。その他、Ⅲ～Ⅶ類はこれに伴う数点の土器類である。

## 第4節 考察

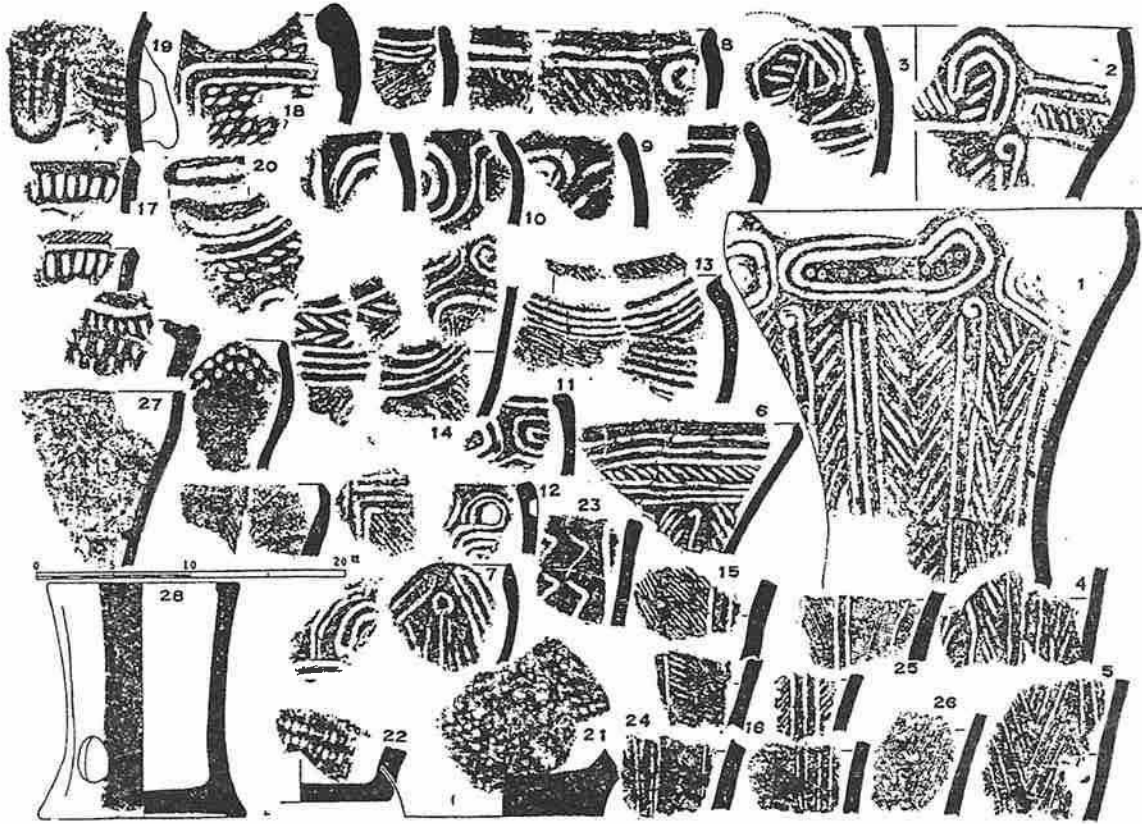
ここでは、考察で述べられていることについて簡単に紹介したい。

竪穴住居跡については、とくに東日本地域中期の諸事例を紹介しながら、番の面遺跡住居跡の方形プラン・4本の主柱・竪穴式炉の形式が「長野県の諸遺跡に見られる中期の主要な一形式たる4柱式方形プランの形式に何らかの連関を辿り得るのではないかとの想定に到達」したとし、本遺跡との中間に位置する岐阜県関市塚原遺跡の加曾利E式期の隅丸方形住居を新事例として紹介している。

遺物については、「湖北の同系遺跡に夥しく検出される自然礫加工の石製遺物を一物も存しない事」をまず指摘されている。これに対し石鏃が主体をなすことは、伊吹山西南麓地域の旧坂田郡の諸遺跡と通有性を示すとする一方で、チャートの原産地が遺跡近傍にあることから「伊吹山西南麓に分布するチャートの石鏃の供給地としての役割を果たした」と推考され、本遺跡の性格を探求するうえで逸すことができないとする。

一方、土器については、主体となるⅠ群土器を「醍醐Ⅳ式群土器（特にそのC類）に認められた隆線文が沈線文に転化し、同じく縁帯文が盛行しながら、その渦巻文は独立退化し、一方口縁に波状、山形の突起を発達せしめている。沈線は概して太く、その太い沈線は隆線に代替させられただけの効果を十分有している」と規定したうえで、やはり東日本の諸遺跡の土器を検討したうえで「即ち関東の編年に従えば加曾利E式後葉の土器に同定」「関東の太平洋沿岸地方や中部地方に分布する一群の土器に対比」されるべき性質を有しているとする。その時期は「隆線文の発達を認めない点で中期末的な現象」と解し、器形も「中期末の基本形態」を有していたうえで、「東日本の諸形式との相互関係の上に形成された地域的な形式」と結論付けられた。

結語において、注目すべき資料として、改めて中期末の竪穴住居跡の存在と、湖北の縄文中期文化において一時期を画す単一の土器文化の形成をあげ、湖北の縄文文化が「東日本殊に信濃・飛騨・美濃等との文化的交流なくしては理解」できず、このような文化的基礎が湖北の地域的文化形成に役立っているとした。



第6图 土器類実測図

## 第4章 調査の成果

### 第1節 石器類 (第8～13図、表1～5、図版4～9)

山根氏所蔵の石器類は318点である。昭和30年12月から故山根隆治氏が採集されていたもので、小江論文(昭和31年)には「山根氏が表面採集によって得た55個(うち完形品は35個)」と紹介されており、今回の資料の中に含まれているものと思われる。石器類の内訳は石鏃、石匙、玉であり、これに小円礫と未製品・破片がある。

#### 石鏃 (第8～13図、1～312)

291点を数える。このうち25点は小江論文でa類とされた大型品である。本報告書ではVI類とした。石鏃の分類については土谷崇夫氏の基準(第7図)を参考にした。石鏃の基部(脚部)と側縁部の組み合わせによる分類法である。

I、凹基無茎… a、脚端部が尖り、脚部の内側が膨らむもの〔小江分類d類〕

b、脚端部が尖り、脚部の内側が直線的なもの〔小江分類d類〕

c、脚端部が丸いもの〔小江分類d類〕

d、基部が浅く、弧状にくぼむ(全体の6分の1以下)〔小江分類c類〕

e、脚部が端部に至って内にすぼまる〔小江分類e類〕

f、脚端部は尖鋭であることが多く、袂りは奥に丸い

g、側縁が外に張り出し脚部が内に傾き尖鋭となり、袂りが長さの2分の1ぐらいに及ぶもの

II、平基無茎…基部が直線的なもの〔小江分類b類〕 III、円基…基部が丸みをおびるもの

IV、尖基…基部が尖るもの V、有基…中茎があるもの

・側縁部…A直線的、B膨らむ、C内湾する、DE側縁部屈曲〔Eは小江分類f類〕

I類(第8～10図、1～184) 1～44はI bのAタイプ、45～51はBタイプ、52はCタイプである。53～87はI cのA、88～91がB、92・93がC、94をEタイプとした。19は欠損した頭部を再加工して再生させている。69は打ち欠きが見られず全体的に丸い。95～125はI dのA、126～128はB、129～132をCタイプとした。98は表裏とも素材面を残して完成している。133～182がI eのA、183がBタイプである。184は他と較べて脚部が長いことからI gのBタイプとした。

185～194はIIのA、195～197はBタイプ、198はCタイプである。199～207はIIIのAタイプ。204は錐部の折れた石錐の可能性はある。208・209はIV類である。208は裏が素材面で基部の調整も不十分である。210～266は、頭部や脚部、側部などがかけており分類が不可能なものである。また分類のV類については、本資料中に該当するものはなかったが、山根家のもうひとつの額(多くは採集場所不明の石器)に、確実に番の面遺跡で採集したと語られた有茎鏃が1点あり、VA類の存在を確認した。

267～291は、両面に粗い打ち欠きを施し、頭部を尖頭状に、基部を円基形にするものがある一方(274・275・276・279・286)、石鏃の未製品の可能性もある大型のVI類とした。267は完形品に近くIII A類の可能性はある。292～312は未製品または破片である。

石材は、99・199・270・295が硅質頁岩であるほかはすべてチャートである。色調は青灰・黄灰・



白灰色の不透明のものが多く、透明・半透明のものを含む。また、赤茶色のものも多い。小江報告でもチャートがほとんどで、わずかにサヌカイト製の完形品と破片1点の出土が記されているほか、黒曜石の石屑3片が採集されている。また、昭和58年から3ヵ年間おこなわれた山東町内遺跡分布調査では、中部山岳地産出の黒曜石の剥片が表採されているという。

その他（第3図、313～319）

313は、刃部とつまみ部を欠くが横型の石匙であろう。314は石匙の完形品である。垂直に立てたつまみをもつ横型のもので、両面加工によって全体を作り出しているが、刃部が甘く粗製である。315は小型の玉類と思われる。石材は緑色岩で、直径6mm大の穴が人工的にあけられている。表面は磨かれている。316～318は採集品に含まれていた小円礫、319は用途不明の銅製品である。

	A側縁直線	B側縁膨らむ	C側縁内湾	D側縁屈曲	E側縁屈曲
I類、凹基無茎鎌 a、脚部が尖り、脚部の内側が膨らむ					
b、脚端部が尖り、脚部の内側が直線的なもの					
c、脚端部がまるいもの					
d、基部が浅く、弧状にくぼむ					
e、脚部が端部に至って内にすぼまる					
f、脚端部は尖であることが多く、袂りは奥に丸い					
g、脚部が内に傾き尖鋭となり、袂りが長さの2分の1に及ぶもの					
II類、平基無茎鎌					
III類、円基鎌					
IV類、尖基鎌					
V類、有茎鎌					

第7図 石鎌の形態分類表(土谷2003より)

## 第2節 土器類 (第14図 1~30)

山根氏が所蔵されている土器片は総数で41点あり、いずれも縄文時代中期末に属するものである。これは、小江報告中の「発見土器は単一の文化系統に属する縄文式土器に限られ」という記載に一致する。ここでは、無文土器を除く30点について触れることにしたい。記載にあたっては口縁部文様帯と胴部の文様帯に大別し、さらに以下のように分類した。

I 群土器 北白川C式でいう深鉢A類と呼ばれる器形の土器群のうち、口縁部文様帯を隆帯または近似する太い沈線で表現する在り系土器 (A~C類は区画内の表現)

A類 縄文 B類 矢羽根沈線 C類 情報不明

II 群土器 深鉢A類のうち、口縁部文様帯を沈線で表現する在り系土器

A類 縄文 B類 矢羽根沈線 C類 情報不明

III 群土器 北白川C式でいう深鉢C類と呼ばれる器形の土器

IV 群土器 口縁部が無文の深鉢形土器

V 群土器 胴部に垂下沈線をもつ土器 (A~C類は沈線間の表現)

A類 矢羽根沈線 B類 曲線沈線 C類 縄文

1~5は同一個体の可能性が高い、肥厚して緩やかに内湾する波状の口縁部で、1は波状の突起部である。尖り気味の隆帯で突起部には渦巻文を、平縁部には楕円形の区画文を描き縄文を充填するI群A類である。頸部から屈曲して垂下する沈線を描く(3)。6も二重沈線の区画内に縄文を充填する。7・8は同一個体で、肥厚して緩やかに内湾する口縁部でワラビ手状の太い沈線内に斜位の短沈線を連続して施す。7の下部の沈線は二股に分かれ、区画内に斜位の沈線を描くI群B類である。山型突起の縁部片側には沈線区画内に矢羽根文を描く。9・10も沈線内に短沈線や刺突を連続して施す。11は太い沈線の渦巻文で隆帯状を呈し、I群に含めた。

12は二重沈線による区画内に縄文を充填するII群A類で、胴部には3条の沈線が下る。13は肥厚して端部で外反する口縁部で、方形の沈線区画内に矢羽根沈線を施す。14は二重沈線による楕円区画内に矢羽根と思われる沈線を施し、胴部には垂下する二重沈線間に曲線沈線を描き、矢羽根沈線を描く。いずれもII群B類である。15は竹管状工具による渦巻文である。16は二重沈線の口縁部文様帯から屈曲して垂下する2条の沈線間に矢羽根を充填する。II群C類。

17は横位の沈線区画内にワラビ手文を描く。内面は未調整で、2カ所に剥がれた痕跡があることから、中空の山型突起か橋状突起と考えられる。III群土器である。18は外に開くIV群の無文土器である。

19~25はV群A類土器で二重垂下沈線に矢羽根沈線を施す。26は二重沈線に曲線で文様を描くB類。27~29は沈線間に縄文を充填するC類である。

番号	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	石材	分類	遺存状態
1	1.4	1.8	0.2	0.41	白灰	チャート	I bA	ほぼ完形
2	1	1.45	0.15	0.2	青灰	チャート	I bA	完形
3	1.3	2.1	0.55	0.8	青灰	チャート	I bA	完形
4	1.6	—	0.3	1	青灰	チャート	I bA	頭部欠
5	1.1	1.6	0.3	0.41	青灰	チャート	I bA	脚部欠
6	1.4	2	0.5	0.84	青灰	チャート	I bA	ほぼ完形
7	—	1.9	0.45	0.83	青灰	チャート	I bA	脚部欠
8	1.15	1.4	0.15	0.17	赤茶	チャート	I bA	完形
9	—	—	0.5	0.68	赤茶	チャート	I bA	頭脚部欠
10	1.3	1.8	0.25	0.35	赤茶	チャート	I bA	完形
11	1.55	1.95	0.3	0.53	赤茶	チャート	I bA	完形
12	—	2	0.35	0.77	赤茶	チャート	I bA	ほぼ完形
13	—	—	0.4	0.94	青灰	チャート	I bA	頭脚部欠
14	—	2.3	0.3	0.64	青灰	チャート	I bA	脚部欠
15	1.75	—	0.4	0.87	黄灰	チャート	I bA	頭部欠
16	1.4	1.9	0.35	0.81	黄灰	チャート	I bA	完形
17	1.3	1.6	0.35	0.39	黄灰	チャート	I bA	完形
18	—	1.8	0.4	0.45	半透明黄灰	チャート	I bA	脚部欠
19	1.5	1.3	0.25	0.48	黄灰	チャート	I bA	(完形)
20	1.6	1.6	0.3	0.61	青灰	チャート	I bA	完形
21	1.4	1.4	0.3	0.49	黄灰	チャート	I bA	完形
22	—	—	0.45	0.78	黄灰	チャート	I bA	頭脚部欠
23	1.4	2.1	0.3	0.62	青灰	チャート	I bA	ほぼ完形
24	—	—	0.35	0.69	青灰	チャート	I bA	頭脚部欠
25	1.3	1.3	0.2	0.32	青灰	チャート	I bA	ほぼ完形
26	1.2	1.8	0.5	0.74	青灰	チャート	I bA	脚部欠
27	1.3	1.8	0.35	0.54	青灰	チャート	I bA	脚部欠
28	—	1.5	0.25	0.34	青灰	チャート	I bA	脚部欠
29	—	—	0.3	0.41	青灰	チャート	I bA	頭脚部欠
30	1.1	—	0.2	0.27	青灰	チャート	I bA	頭部欠
31	—	1.6	0.4	0.37	青灰	チャート	I bA	脚部欠
32	—	1.7	0.25	0.37	青灰	チャート	I bA	脚部欠
33	1.55	1.75	0.35	0.58	青灰	チャート	I bA	完形
34	—	2.2	0.2	0.59	青灰	チャート	I bA	脚部欠
35	—	1.7	0.3	0.23	半透明黄灰	チャート	I bA	1/2欠
36	—	2.1	0.25	0.37	黄灰	チャート	I bA	脚部欠
37	—	—	0.35	0.82	青灰	チャート	I bA	頭脚部欠
38	2	2.2	0.45	1.16	赤茶	チャート	I bA	ほぼ完形
39	1.5	1.45	0.3	0.4	青灰	チャート	I bA	ほぼ完形
40	1.3	—	0.2	0.31	青灰	チャート	I bA	頭部欠
41	1.4	—	0.35	0.68	青灰	チャート	I bA	頭部欠
42	1.7	—	0.3	1.13	赤茶	チャート	I bA	頭部欠
43	1.4	2.05	0.3	0.61	青灰	チャート	I bA	完形
44	—	1.3	0.45	0.66	黄灰	チャート	I bA	脚部欠
45	1.6	2	0.35	1.04	青灰	チャート	I bB	完形
46	1	—	0.3	0.59	赤茶	チャート	I bB	頭部欠
47	—	—	0.2	0.26	黄灰	チャート	I bB	脚部欠
48	1.5	2	0.35	1.07	青灰	チャート	I bB	完形
49	1.05	1.6	0.3	0.53	青灰	チャート	I bB	完形
50	—	—	0.35	0.9	黄灰	チャート	I bB	頭脚部欠
51	1.4	1.8	0.3	0.64	白灰	チャート	I bB	ほぼ完形
52	1.45	1.6	0.25	0.39	半透明青灰	チャート	I bC	ほぼ完形
53	1.2	2.8	0.4	1.26	青灰	チャート	I cA	脚部欠
54	1.9	2.15	0.6	2.39	黄灰	チャート	I cA	完形
55	1.7	2.25	0.65	1.87	青灰	チャート	I cA	完形
56	1.7	2.2	0.5	1.18	青灰	チャート	I cA	完形
57	1.4	1.9	0.5	1.07	半透明青灰	チャート	I cA	完形
58	1.65	2.3	0.65	1.02	青灰	チャート	I cA	完形
59	—	2.3	0.4	1.16	青灰	チャート	I cA	脚部欠
60	1.55	2.5	0.45	1.32	青灰	チャート	I cA	脚部欠
61	—	2.9	0.4	0.67	半透明黄灰	チャート	I cA	脚部欠
62	1.7	1.8	0.5	1.12	青灰	チャート	I cA	完形
63	—	2.2	0.4	1.23	赤茶	チャート	I cA	脚部欠
64	1.3	1.95	0.4	0.74	半透明黄灰	チャート	I cA	完形
65	—	2	0.4	0.86	青灰	チャート	I cA	脚部欠
66	1.5	2.1	0.4	1.09	黄灰	チャート	I cA	完形

表1 石器観察表(1)

番号	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	石材	分類	遺存状態
67	—	—	0.25	0.69	青灰	チャート	I cA	頭脚部欠
68	1.1	1.9	0.35	0.5	黄灰	チャート	I cA	完形
69	1.05	1.4	0.3	0.44	青灰	チャート	I cA	完形
70	1.7	2.1	0.55	1.63	黄灰	チャート	I cA	完形
71	—	—	0.3	0.8	青灰	チャート	I cA	頭部欠
72	1.3	1.6	0.4	0.82	青灰	チャート	I cA	完形
73	1.3	1.2	0.25	0.45	青灰	チャート	I cA	完形
74	—	1.4	0.3	0.42	青灰	チャート	I cA	脚部欠
75	1.25	1.6	0.25	0.47	青灰	チャート	I cA	完形
76	0.9	1	0.2	0.15	青灰	チャート	I cA	頭脚部欠
77	1.9	2.2	0.45	1.27	半透明青灰	チャート	I cA	完形
78	1.3	1.6	0.35	0.57	赤茶	チャート	I cA	完形
79	1.3	—	0.35	0.42	白灰	チャート	I cA	頭部欠
80	1.7	1.85	0.4	0.9	赤茶	チャート	I cA	完形
81	—	—	0.15	0.65	青灰	チャート	I cA	未製品
82	1.7	—	0.4	1.31	青灰	チャート	I cA	頭部欠
83	—	1.7	0.3	0.5	青灰	チャート	I cA	ほぼ完形
84	—	—	0.35	0.96	赤茶	チャート	I cA	頭脚部欠
85	1	1.3	0.1	0.19	白灰	チャート	I cA	ほぼ完形
86	1.5	2	0.3	1.07	青灰	チャート	I cA	完形
87	1.05	1.85	0.2	0.4	青灰	チャート	I cA	完形
88	1.75	2.4	0.35	1.98	青灰	チャート	I cB	頭部欠
89	—	2.15	0.6	1.14	青灰	チャート	I cB	側部欠
90	1.25	1.7	0.25	0.68	赤茶	チャート	I cB	完形
91	1.8	2.2	0.55	2.07	赤茶	チャート	I cB	完形
92	—	2.95	0.4	1.29	青灰	チャート	I cC	脚部欠
93	2.1	—	0.3	1.19	青灰	チャート	I cC	頭部欠
94	1.05	1.8	0.3	0.62	赤茶	チャート	I cE	完形
95	1.5	1.7	0.65	1.32	青灰	チャート	I dA	完形
96	—	—	0.35	1.44	青灰	チャート	I dA	頭脚部欠
97	1.5	1.7	0.5	1.21	青灰	チャート	I dA	ほぼ完形
98	1.3	1.6	0.15	0.45	青灰	チャート	I dA	ほぼ完形
99	1.8	2.4	0.85	2.23	青灰	硅質頁岩	I dA	完形
100	1.7	—	0.5	2.01	青灰	チャート	I dA	頭部欠
101	1.5	2.1	0.5	1.37	半透明黄灰	チャート	I dA	完形
102	—	—	0.4	0.49	青灰	チャート	I dA	頭脚部欠
103	1	1.5	0.25	0.28	赤茶	チャート	I dA	完形
104	1	1.25	0.25	0.25	赤茶	チャート	I dA	脚部欠
105	1.1	1.6	0.25	0.46	赤茶	チャート	I dA	脚部欠
106	1.2	1.3	0.25	0.32	青灰	チャート	I dA	完形
107	1.4	1.75	0.25	0.54	黄灰	チャート	I dA	完形
108	1.5	1.5	0.25	0.37	黄灰	チャート	I dA	完形
109	1.1	1.3	0.2	0.26	黄灰	チャート	I dA	完形
110	—	—	0.4	0.45	黄灰	チャート	I dA	脚部欠
111	0.9	1.4	0.15	0.22	半透明黄灰	チャート	I dA	完形
112	—	—	0.2	0.35	黄灰	チャート	I dA	頭脚部欠
113	—	1.8	0.4	0.9	黄灰	チャート	I dA	脚部欠
114	1.55	1.85	0.45	1	青灰	チャート	I dA	完形
115	1.15	1.6	0.3	0.47	青灰	チャート	I dA	完形
116	1.05	1.5	0.2	0.29	赤茶	チャート	I dA	完形
117	—	2.3	0.25	0.64	青灰	チャート	I dA	脚部欠
118	1.6	—	0.45	0.56	青灰	チャート	I dA	頭部欠
119	1.25	1.7	0.3	0.68	赤茶	チャート	I dA	完形
120	—	2.2	0.5	1.42	青灰	チャート	I dA	脚部欠
121	1.8	2.3	0.55	2.03	青灰	チャート	I dA	ほぼ完形
122	1.4	2.2	0.4	0.9	赤茶	チャート	I dA	完形
123	—	—	0.2	0.56	青灰	チャート	I dA	脚部欠
124	—	—	0.15	0.38	白灰	チャート	I dA	側部欠
125	—	1.2	0.25	0.38	黒	チャート	I dA	脚部欠
126	1.8	2	0.55	1.53	黒	チャート	I dB	完形
127	1	1.3	0.25	0.29	黄灰	チャート	I dB	完形
128	1	—	0.3	0.41	青灰	チャート	I dB	頭部欠
129	1.5	2	0.35	0.84	青灰	チャート	I dC	完形
130	1.6	1.65	0.2	0.4	半透明黄灰	チャート	I dC	ほぼ完形
131	1.5	—	0.45	1.02	青灰	チャート	I dC	頭部欠
132	1.1	1.4	1.15	0.22	黄灰	チャート	I dC	完形

表2 石器観察表(2)

番号	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	石材	分類	遺存状態
133	—	2.6	0.3	0.57	青灰	チャート	IeA	脚部欠
134	—	—	0.35	0.82	青灰	チャート	IeA	脚部欠
135	1.4	—	0.3	0.98	青灰	チャート	IeA	頭部欠
136	—	2	0.35	0.82	青灰	チャート	IeA	脚部欠
137	1.5	2.4	0.35	0.77	青灰	チャート	IeA	完形
138	1.3	1.8	0.4	0.74	青灰	チャート	IeA	完形
139	1.5	—	0.4	1.26	半透明黄灰	チャート	IeA	頭部欠
140	—	—	0.5	1.08	青灰	チャート	IeA	頭脚部欠
141	1.25	2.1	0.3	0.65	青灰	チャート	IeA	完形
142	1.6	—	0.25	0.82	青灰	チャート	IeA	頭部欠
143	1.2	1.7	0.25	0.51	赤茶	チャート	IeA	完形
144	1	—	0.35	0.33	赤茶	チャート	IeA	頭部欠
145	1.2	1.8	0.35	0.63	青灰	チャート	IeA	完形
146	1.5	—	0.35	0.61	半透明赤茶	チャート	IeA	頭部欠
147	1.4	1.9	0.35	0.75	半透明黄灰	チャート	IeA	完形
148	1.3	1.9	0.3	0.65	赤茶	チャート	IeA	頭脚部欠
149	1.4	1.9	0.55	0.86	赤茶	チャート	IeA	完形
150	1.7	2.3	0.4	1.19	青灰	チャート	IeA	完形
151	1.3	—	0.3	0.58	黄灰	チャート	IeA	頭部欠
152	1.6	1.8	0.3	0.81	黄灰	チャート	IeA	完形
153	—	2.1	0.6	1.46	黄灰	チャート	IeB	脚部欠
154	—	1.8	0.15	0.33	半透明黄灰	チャート	IeA	脚部欠
155	—	—	0.2	0.34	白灰	チャート	IeA	頭脚部欠
156	1	—	0.3	0.42	半透明黄灰	チャート	IeA	頭部欠
157	—	—	0.4	0.95	黄灰	チャート	IeA	頭脚部欠
158	—	—	0.2	0.24	黄灰	チャート	IeA	頭脚部欠
159	1.6	—	0.2	0.48	青灰	チャート	IeA	頭部欠
160	1	2.2	0.25	0.62	青灰	チャート	IeA	完形
161	—	—	0.25	0.19	青灰	チャート	IeA	頭部欠
162	1.4	2.2	0.4	0.73	青灰	チャート	IeA	完形
163	1.5	—	0.3	0.6	黄灰	チャート	IeA	頭部欠
164	1.2	1.7	0.3	0.67	青灰	チャート	IeA	脚部欠
165	1.1	1.6	0.28	0.38	青灰	チャート	IeA	完形
166	1.2	1.4	0.3	0.4	青灰	チャート	IaA	完形
167	—	—	0.25	0.48	青灰	チャート	IeA	頭脚部欠
168	—	—	0.25	0.4	青灰	チャート	IeA	頭脚部欠
169	—	1.35	0.4	0.43	半透明青灰	チャート	IeA	脚部欠
170	—	—	0.35	0.5	青灰	チャート	IeA	頭脚部欠
171	—	—	0.2	0.44	青灰	チャート	IeA	頭側部欠
172	1.3	1.7	0.4	0.72	青灰	チャート	IeA	ほぼ完形
173	—	1.6	0.4	0.83	黄灰	チャート	IeA	脚部欠
174	1.4	2.35	0.25	0.48	黄灰	チャート	IeA	完形
175	1.4	2	0.3	0.5	黒	チャート	IeA	完形
176	1.4	1.65	0.4	0.73	青灰	チャート	IeA	完形
177	1.15	1.7	0.25	0.34	白灰	チャート	IeA	完形
178	1.1	1.5	0.35	0.4	青灰	チャート	IeA	完形
179	1.3	—	0.25	0.67	赤茶	チャート	IeA	頭部欠
180	1.4	1.8	0.5	0.79	白灰	チャート	IeA	完形
181	1.1	1.2	0.15	0.25	黄灰	チャート	IeA	完形
182	—	1.5	0.2	0.37	赤茶	チャート	IeA	脚部欠
183	1.15	2	0.45	0.93	赤茶	チャート	IeB	完形
184	—	1.7	0.25	0.27	透明白灰	チャート	IgB	脚部欠
185	1.1	2.3	0.4	0.89	青灰	チャート	IIA	完形
186	1.4	1.9	0.4	1.11	青灰	チャート	IIA	完形
187	—	2.2	0.3	0.64	半透明黄灰	チャート	IIA	脚部欠
188	—	2.25	0.3	0.71	青灰	チャート	IIA	脚部欠
189	0.8	1.2	0.2	0.18	赤茶	チャート	IIA	完形
190	1.6	2.45	0.45	1.97	赤茶	チャート	IIA	完形
191	1.3	1.5	0.4	0.62	黄灰	チャート	IIA	完形
192	—	1.8	0.4	0.71	青灰	チャート	IIA	完形
193	2.1	—	0.55	1.91	青灰	チャート	IIA	頭部欠
194	1.4	1.6	0.3	0.63	青灰	チャート	IIA	完形
195	1.3	2	0.45	0.2	青灰	チャート	IIB	完形
196	—	2.2	0.35	0.69	青灰	チャート	IIB	側部欠
197	1.1	1.85	0.3	0.7	赤茶	チャート	IIB	完形
198	1.5	—	0.55	1.57	青灰	チャート	IIC	頭部欠

表3 石器観察表(3)

番号	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	石材	分類	遺存状態
199	—	2.9	0.5	2.12	青灰	硅質頁岩	ⅢA	ほぼ完形
200	1.6	2.3	0.6	1.92	青灰	チャート	ⅢA	完形
201	1.6	2.1	0.17	2.24	半透明黄灰	チャート	ⅢA	完形
202	1.75	1.6	0.45	1.23	青灰	チャート	ⅢA	完形
203	1.45	1.75	0.35	0.86	青灰	チャート	ⅢA	完形
204	—	—	0.28	1.2	青灰	チャート	ⅢA	ほぼ完形
205	1.5	2.2	0.6	1.57	半透明青灰	チャート	ⅢA	完形
206	1.8	2.85	0.6	2.91	白灰	チャート	ⅢA	完形
207	2	2.1	0.6	2.21	青灰	チャート	ⅢA	完形
208	1.5	2.5	0.35	1.39	青灰	チャート	Ⅳ	完形
209	1.85	2.2	0.5	1.19	白灰	チャート	Ⅳ	完形
210	1.3	2.7	0.6	1.9	青灰	チャート		脚部欠
211	—	—	0.55	1.81	青灰	チャート		脚部欠
212	—	—	0.55	1.33	青灰	チャート		脚部欠
213	—	2.35	0.3	0.91	青灰	チャート		脚部欠
214	—	—	0.3	0.84	青灰	チャート		頭脚部欠
215	—	0.6	0.6	1.38	青灰	チャート		側部欠
216	—	—	0.65	2.75	黄灰	チャート		脚部欠
217	—	—	0.3	1.06	半透明黄灰	チャート		頭脚部欠
218	—	—	0.45	0.95	半透明黄灰	チャート		脚部欠
219	—	—	0.3	0.56	青灰	チャート		脚部欠
220	—	—	0.25	0.58	青灰	チャート		脚部欠
221	—	—	0.2	0.51	青灰	チャート		脚部欠
222	—	—	0.7	1.33	青灰	チャート		脚部欠
223	—	—	0.35	0.61	青灰	チャート		脚部欠
224	—	—	0.3	0.58	青灰	チャート		脚部欠
225	—	—	0.35	1.27	半透明黄灰	チャート		脚部欠
226	—	—	0.25	0.98	赤茶	チャート		頭側部欠
227	—	—	0.4	0.71	赤茶	チャート		脚部欠
228	—	—	0.3	0.79	黄灰	チャート		頭脚部欠
229	—	—	0.2	0.5	青灰	チャート		脚部欠
230	—	—	0.4	0.44	赤灰	チャート		頭脚部欠
231	—	—	0.25	0.43	青灰	チャート		頭脚部欠
232	—	—	0.4	0.95	黄灰	チャート		脚部欠
233	—	—	0.3	0.88	青灰	チャート		頭脚部欠
234	—	—	0.3	0.74	黄灰	チャート		脚部欠
235	—	—	0.6	1.34	黄灰	チャート		脚部欠
236	—	—	0.25	0.35	青灰	チャート		脚部欠
237	—	—	0.3	0.39	青灰	チャート		脚部欠
238	—	—	0.25	0.3	青灰	チャート		頭脚部欠
239	—	1.5	0.35	0.39	青灰	チャート		脚部欠
240	—	—	0.2	0.19	青灰	チャート		頭脚部欠
241	—	1.4	0.25	0.24	青灰	チャート		脚部欠
242	—	—	0.23	0.21	青灰	チャート		頭脚部欠
243	—	—	0.2	0.19	青灰	チャート		脚部欠
244	—	—	0.25	0.33	青灰	チャート		頭脚部欠
245	—	—	0.28	0.51	半透明青灰	チャート		頭脚部欠
246	—	—	0.55	1	青灰	チャート		頭脚部欠
247	—	—	0.45	0.5	青灰	チャート		頭脚部欠
248	—	—	0.45	0.78	青灰	チャート		頭脚部欠
249	—	—	0.4	0.8	半透明青灰	チャート		頭脚部欠
250	—	—	0.63	0.95	黄灰	チャート		脚部欠
251	—	—	0.5	1.32	青灰	チャート		脚部欠
252	—	—	0.25	0.11	赤茶	チャート		脚部欠
253	—	—	0.8	2.97	赤茶	チャート		脚部欠
254	—	—	0.3	0.19	赤茶	チャート		脚側部欠
255	—	—	0.65	1.74	白灰	チャート		脚部欠
256	—	—	0.3	0.7	青灰	チャート		脚部欠
257	—	—	0.32	0.68	青灰	チャート		脚部欠
258	—	—	0.55	0.95	青灰	チャート		脚部欠
259	—	—	0.2	0.14	青灰	チャート		脚部欠
260	—	—	0.25	0.39	青灰	チャート		脚部欠
261	—	—	0.15	0.16	赤茶	チャート		脚部欠
262	—	—	0.35	0.75	青灰	チャート		頭脚部欠
263	—	—	0.5	1.61	青灰	チャート		脚部欠
264	—	—	0.2	0.4	青灰	チャート		脚部欠

表4 石器観察表(4)

番号	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色調	石材	分類	遺存状態
265	—	—	0.35	0.7	青灰	チャート		脚部欠
266	—	—	0.25	0.48	乳白	チャート		脚部欠
267	2.1	3.1	0.75	4.6	赤茶	チャート	VI	
268	2.85	4.4	1.3	16.14	赤茶	チャート	VI	
269	1.9	3	0.75	3.92	青灰	チャート	VI	
270	2.2	3.25	1.05	6.9	青灰	硅質頁岩	VI	
271	1.9	3.9	1.3	6.59	青灰	チャート	VI	
272	1.9	2.6	0.75	4.02	半透明黄灰	チャート	VI	
273	1.8	2.55	0.7	2.71	青灰	チャート	VI	
274	1.8	2.9	0.65	4.2		チャート	VI	
275	1.6	2.4	0.6	2.12	黄灰	チャート	VI	
276	1.85	2.8	0.65	3.71	半透明青灰	チャート	VI	
277	1.65	2.75	0.7	3.41	青灰	チャート	VI	
278	1.75	—	0.45	1.67	黄灰	チャート	VI	頭部欠
279	—	—	0.9	3.56	白灰	チャート	VI	
280	—	—	0.6	4.41	青灰	チャート	VI	脚部欠
281	—	—	1	6.29	青灰	チャート	VI	
282	—	2.5	0.5	1.63	青灰	チャート	VI	頭部欠
283	2.5	3	0.85	8.02	青灰	チャート	VI	
284	3	3.3	0.9	9.08	青灰	チャート	VI	
285	2.1	2.8	0.6	4.4	青灰	チャート	VI	
286	1.9	3	0.6	2.84	赤茶	チャート	VI	
287	—	—	0.3	1.17	赤茶	チャート	VI	
288	1.9	2.6	0.6	3.83	赤茶	チャート	VI	
289	1.6	2.5	0.6	2.28	赤茶	チャート	VI	
290	2.2	—	0.5	2.76	青灰	チャート	VI	頭部欠
291	—	—	0.65	3.47	赤茶	チャート	VI	
292	1.65	2.45	0.6	2.72	黄灰	チャート		未製品
293	0.8	2.1	0.5	1.06	青灰	チャート		未製品
294	1.6	2.1	0.45	1.61	青灰	チャート		未製品
295	—	—	0.5	2.13	青灰	硅質頁岩		未製品
296	—	—	0.3	0.73	青灰	チャート		未製品
297	—	—	0.55	1.38	青灰	チャート		未製品
298	3	2.7	0.75	6.37	黄灰	チャート		石材
299	2.1	2.05	0.5	1.43	青灰	チャート		石材
300	—	—	0.3	0.94	赤茶	チャート		石材
301	—	—	0.55	1.95	赤茶	チャート		石材
302	—	—	0.2	0.43	赤茶	チャート		石材
303	—	—	0.45	0.66	赤茶	チャート		石材
304	0.9	—	0.15	0.34	半透明白灰	チャート		石材
305	1.4	—	0.2	0.47	半透明黄灰	チャート		石材
306	—	2	0.45	0.73	透明黒茶	チャート		石材
307	—	—	0.7	1.38	青灰	チャート		石材
308	2	2.1	0.7	2.2	透明黒茶	チャート		石材
309	1.15	2.55	0.6	1.86	赤茶	チャート		石材
310	1.6	—	0.4	0.87	半透明青灰	チャート		石材
311	1.1	3.2	0.35	1.32	赤茶	チャート		石材
312	—	—	0.25	0.43	白灰	チャート		石材
313	—	—	1.4	8.11	黄灰	チャート	石匙?	
314	5	—	0.95	13.48	青灰	チャート	石匙	完形
315	—	—	0.6	3.07	黒緑	緑色岩	玉	2/3欠
316	1.8	2.5	1.1	7.81	灰	硅質砂岩		円礫
317	9.5	2.55	0.9	5.03	緑灰	緑色岩		円礫
318	—	—	0.4	1.38	黒	頁岩		不明
319				29.11				スラグ

表5 石器観察表(5)

## 第5章 調査のまとめ

ここでは多量に採集されている石鏃を取り上げて、番の面遺跡の性格に迫りたい。

前章第1節で209点の石鏃をⅠ～Ⅳに分類した。このうち、Ⅰが184点で約88%とほとんどを占める(表6)。ⅠだけをみるとⅠbとⅠeが、それぞれ全体の24%でやや突出し、Ⅰc 20%、Ⅰd 18%が拮抗している。側縁部の形状は、Aの直線的なものが87%と圧倒的に多く、番の面遺跡で採集されている石鏃は、Ⅰ類のb～eのいずれかで、側縁部は直線的なものがほとんどを占めていることが分かる。

つぎに、石鏃の形態と法量の関係についてみてみたい(表7～9)。Ⅱ類は幅1.0～1.5cm、長さ1.5～2.0cmにあり中型のものが多い。Ⅲ類は幅1.5～1.8cm、長さ1.6～2.3cmでⅡ類よりは全体に大きい。いずれも幅と長さの比率は1:1.5あたりに分布する。

Ⅰ類は全体でみると、幅1.0～2.0cm、長さ1.2～2.4cmの中に収まる形で分布し、幅長比は1:1.5に集中している。これを、突出するⅠb～eの各Aタイプでみると、ⅠbAは幅1.3～1.7cm、長さ1.3～2.0cmに集中し、幅長比1:1の小型品が多い。ⅠcAは幅1.0～1.3cm、長さ1.5～1.9cmの小型品①と、幅1.5～1.9cm、長さ1.8～2.3cmの大型品②に二分される。ⅠdAは幅1.0～1.8cm、長さ1.2～2.4cmの間にありまとまりが見られない。ⅠeAは幅1.0～1.4cm、長さ1.5～2.0cmの中型品が多く、幅長比は1:1.5である。

以上のことから番の面遺跡の石鏃は、その形態と法量から、

〔小型品〕ⅠbA・ⅠcA①      〔中型品〕ⅠeA・Ⅱ      〔大型品〕ⅠcA②・Ⅲ  
に分けることができるのではないだろうか。

さて、鈴木道之助氏の論考(鈴木1983)から石鏃の年代的・地域的变化をみると、縄文草創期から早期の石鏃は、長脚鏃・鍬形鏃・局部磨製石鏃・五角形鏃などが特徴的にみられる。前期の東海・近畿地方は、平基無茎鏃(本稿のⅡ類)が主体を占めるという。中期は、小型の凹基無茎鏃が主体を占めるが、石鏃の発見量も一般的に少ないという。さらに、早期後半から中期後半までの石鏃の組成を概観した土谷崇夫氏によると、中期前半(「鷹島式」～「船元Ⅲ式」)の「奈良・京都・滋賀」では、Ⅰbが最も多く見られ、Ⅰa・Ⅰc・Ⅰd、Ⅱ類がわずかに(10%程度ずつ)みられるという。中期後半(「船元Ⅳ」～「北白川C4」)になると資料数も少ないものの、Ⅰbが70%以上でその他の凹基無茎鏃が10%以下ずつ存在する。

これをみると、ⅠeがⅠbと同数みられ、ⅠcもⅠdも20%前後を占める番の面遺跡の石鏃の組成は、全体的な近畿地方の様相とは異なり、Ⅰbが34%と比較的多く、Ⅰc 20%、Ⅰd 22%、Ⅱ類15%の組み合わせとなる長野県の中期後半の様相に似る。この点でも東日本の様相をみることができる。ただし、番の面遺跡には特殊な事情がある。地理的な環境で述べたとおり、近くに良質なチャートの露頭があり、この遺跡が石器の生産地と考えられていることである。番の面遺跡に石器の大中小の規格があり、複数の形態があることは、生産地としてさまざまな用途や性格に対応するためであったと考えられる。様々な規格・形態を生じさせる原因は、対象となる獲物や装着する矢の形態・使用法の違いなどの需要に応じたものであろう。出土している土器が、中期末にほぼ限られることから、時期差による形態の分化の可能性は低いと思われる。

また、今回の分類でⅥ類とした大型組成の一群について、小江氏は「形態用途未分化の状態」



であるが、発見総数の約4割を占めることから注目されている。北近江には類例がなく、近畿地方の他の遺跡で粗石器・石鏃・石槍・尖頭器とされていることをあげながら、番の面遺跡に裁断具がないこと、その大きさや厚さからサイドスクレーパーとして用いられたと結論付けている。しかし、今回の資料中に石匙が認められることや、VI類の多くが頭部先端を意識して加工していることから、基部が丸みを帯びるIII類、および、その未製品と考えられる。石器生産地として、大きな破片がとれた時には、このような厚くて大きいものを作ったと思われ、石鏃としてとらえることが妥当であろう。

さて、今回の調査では、石鏃以外の石器は石匙が2点あるのみで、過去にも、石錐1、三日月状石器1、石斧1、小形砥石1がわずかに出土しているのみである。これは、石鏃が少なく、磨石・石皿・石錘を多く出土する北近江の同時期の遺跡とは様相がまったく異なる。

それでは、番の面遺跡で作られていた石器はどこに供給されていたのだろうか。長浜市醍醐遺跡

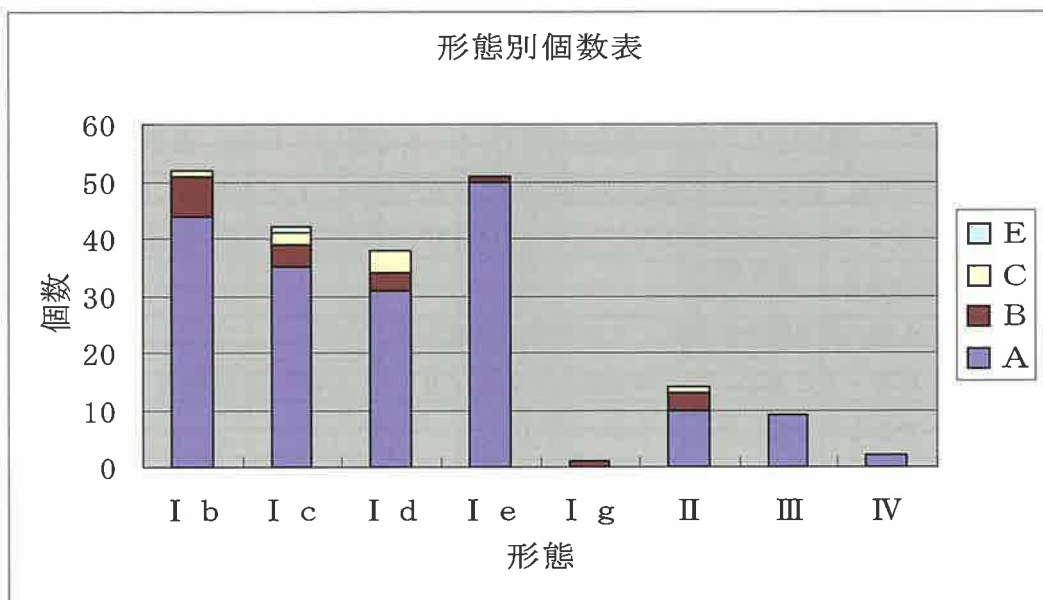


表6 形態別個数表

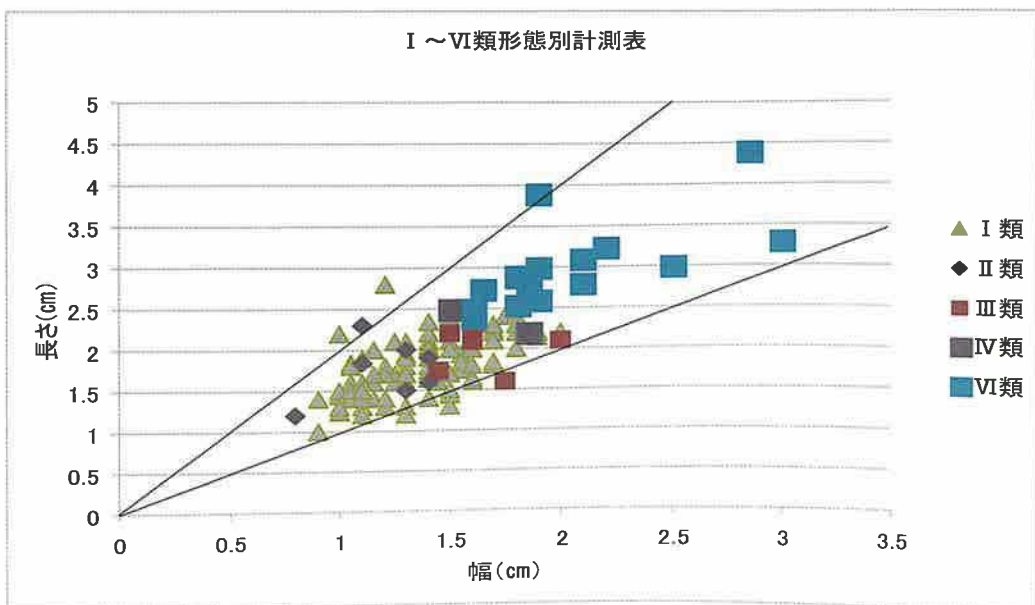


表7 I～VI類形態別計測表

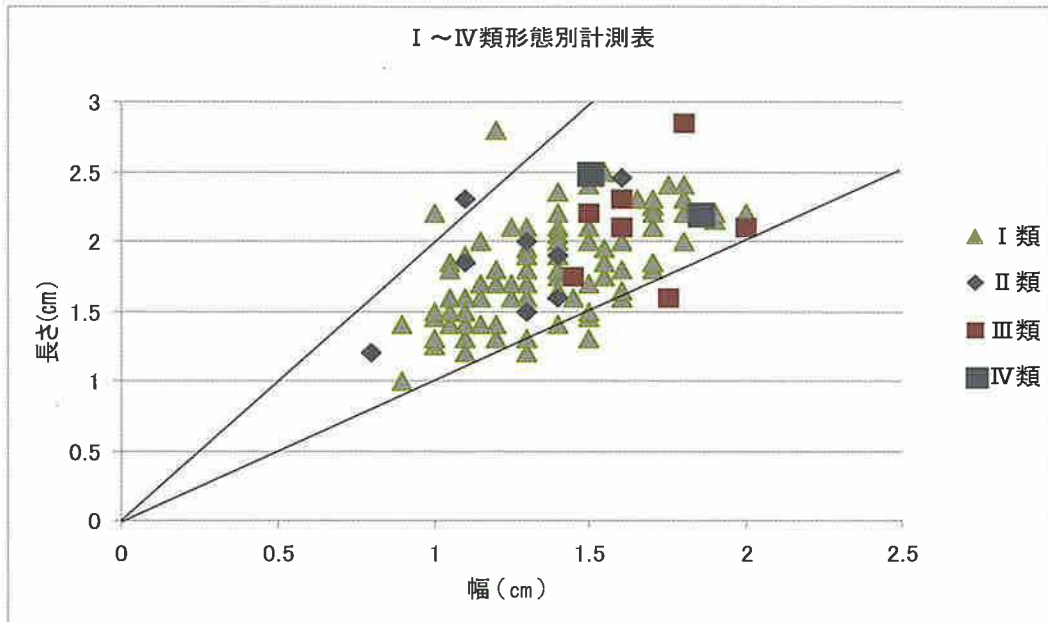


表 8 I～IV類形態別計測表

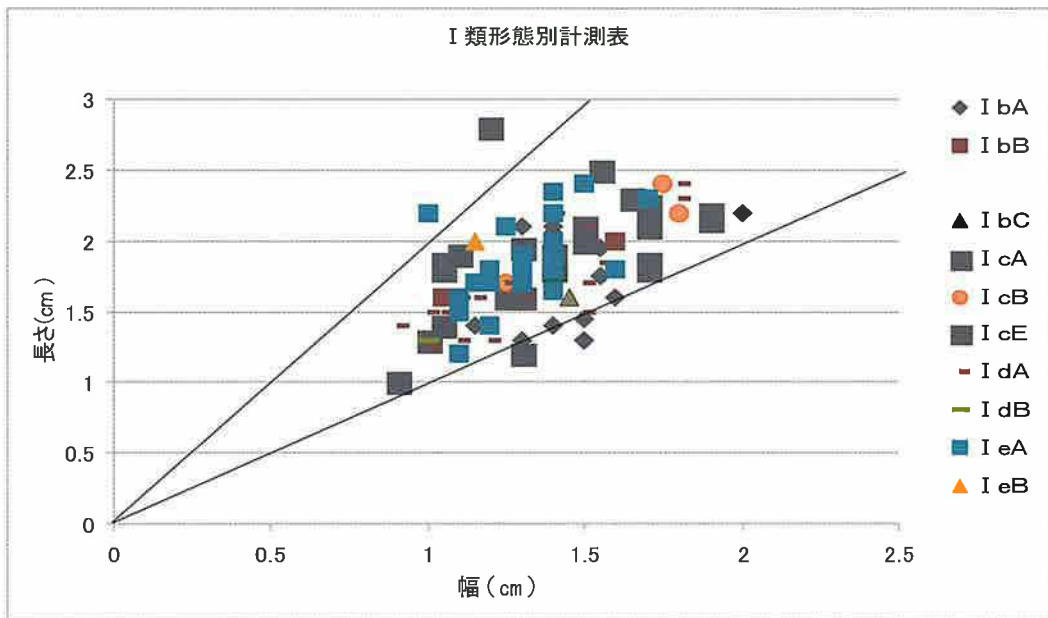


表 9 I類形態別計測表

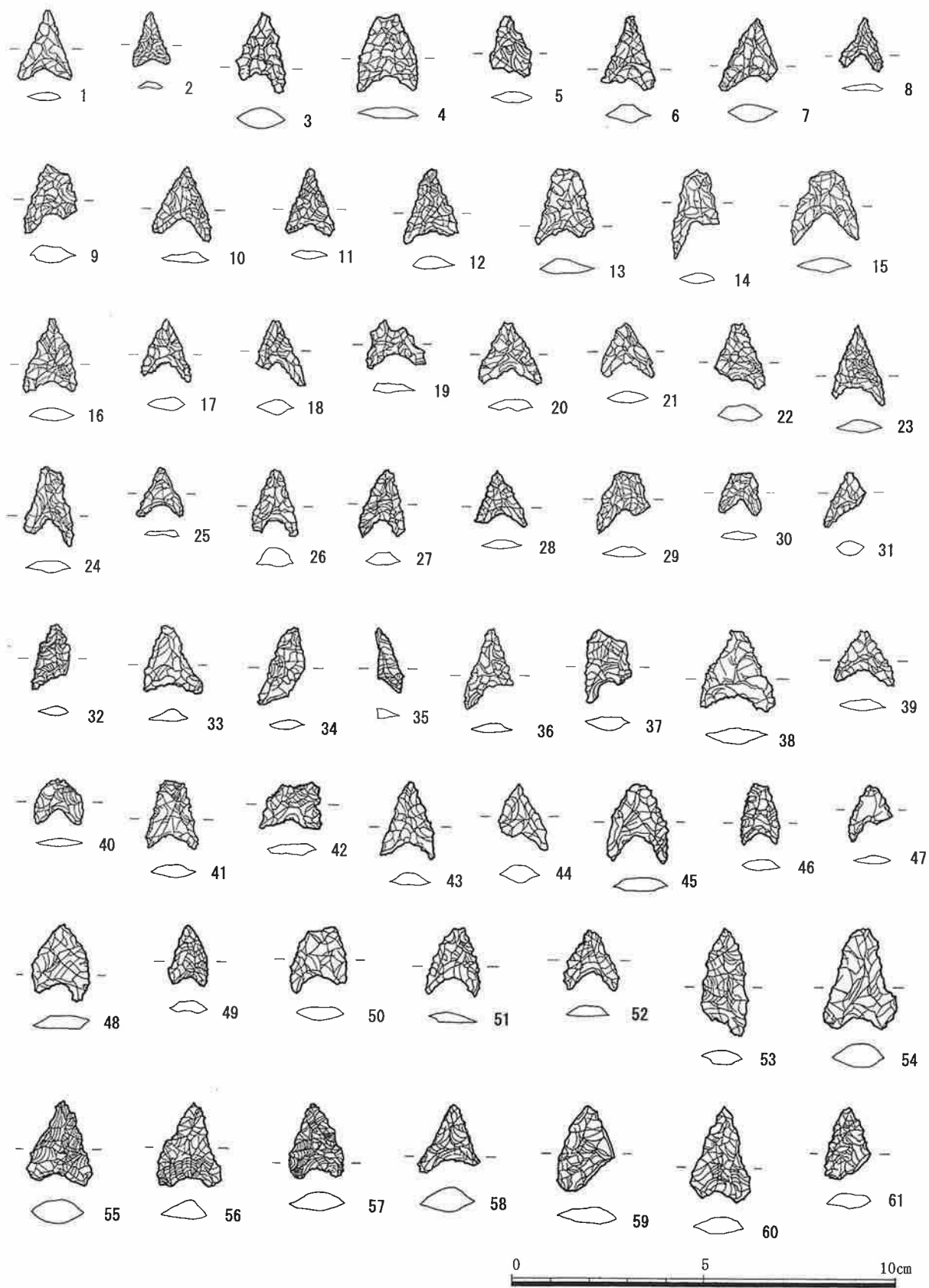
の石器の石材はチャート10点、サヌカイト3点、黒曜石1点でチャートが71.4%と高い割合を示す。石鏃の石材別割合を県内の縄文遺跡で見ると、米原市磯山城遺跡では、チャート19点、サヌカイト（下呂石含む）31点、安山岩1点で、チャートは35.9%である。東近江市正楽寺遺跡では41点すべてサヌカイト。近江八幡市後川遺跡も全てサヌカイト（一部安山岩の可能性あり）。大津市粟津第3貝塚（中期末から後期前葉・晩期）では、1000点以上の99%がサヌカイトである。東に目を転じると、岐阜県関ヶ原町小関御祭田遺跡ではチャート13点、サヌカイト3点、黒曜石1点、石英1点で、チャートが72%となる。滋賀県全体では、北近江地域にいくほどチャートの使用率が上がり、隣接する西美濃地方でも高い。

この傾向を考えるうえで、東西文化の接点に位置し、石鏃を供給した番の面遺跡の存在は重要

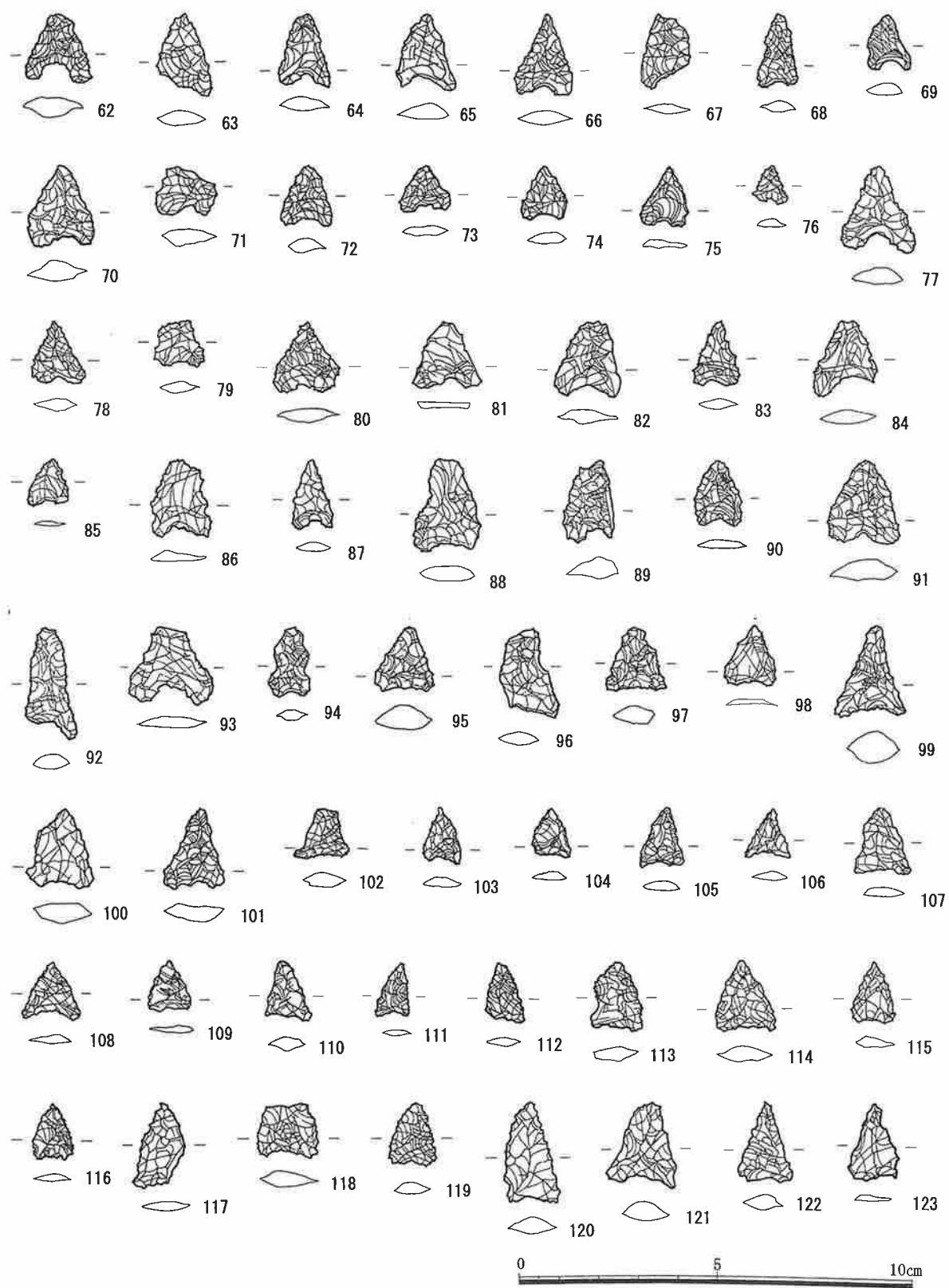
になる。ただし、番の面遺跡は、規模としては小さく、存続期間も限られることから、周辺遺跡への石鏃の供給は、北近江の縄文時代全体でみると限定的なものであっただろう。だとしても、今回の調査で良好な一括資料をはじめて提示することができたことは、今後の県内および西美濃地方での縄文遺跡の調査において非常に有益であると考ええる。

〈参考文献〉

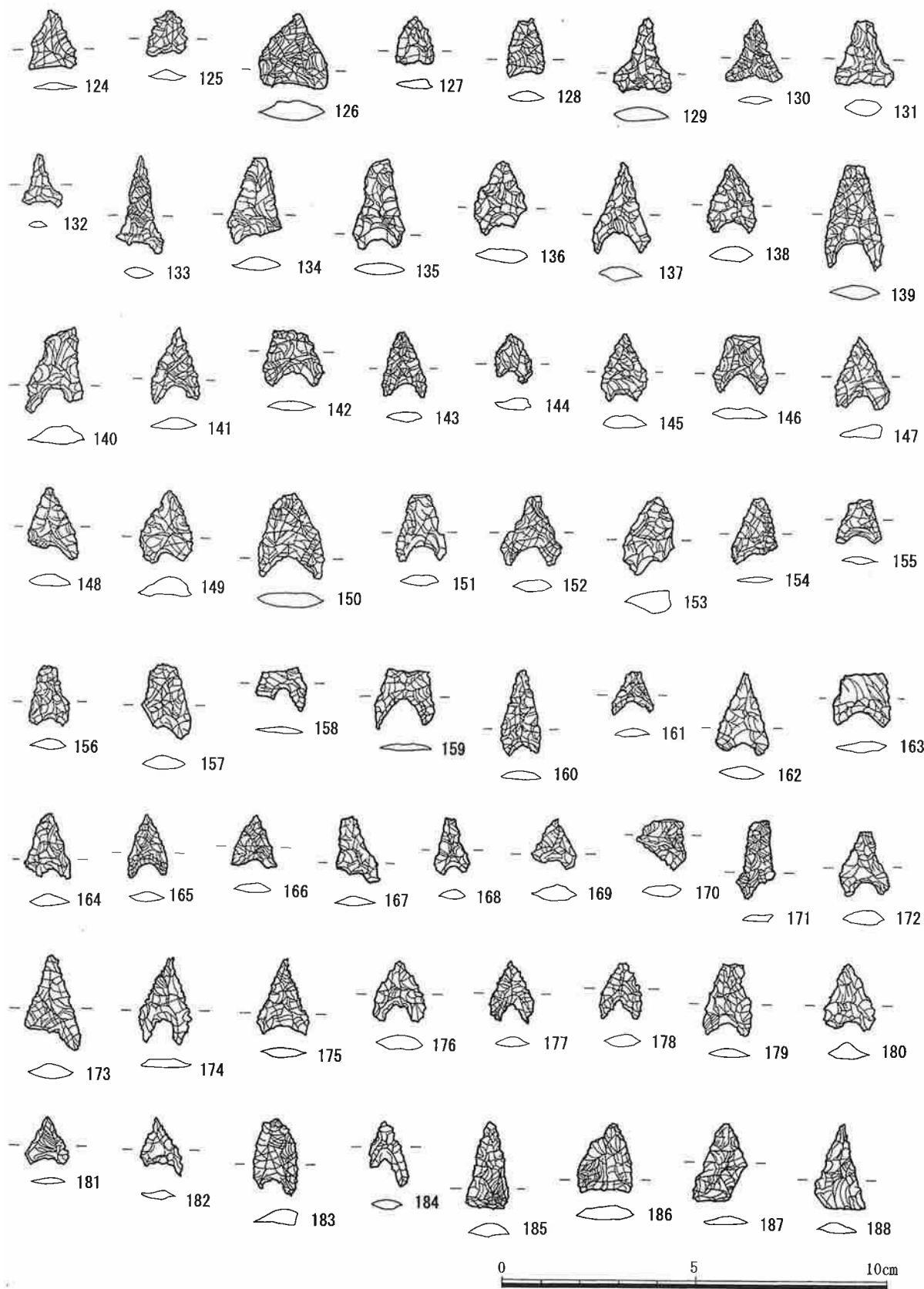
- 伊吹町史編纂委員会1997『伊吹町史 通史編上』伊吹町
- 大知正枝1997『小関御祭田遺跡』森林開発公団岐阜地方建設部 (財)岐阜県文化財保護センター
- 亀井節夫ほか1985『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 久保勝正2004「縄文時代後期・晩期の石鏃について」『縄文時代の石器Ⅲ—関西の縄文後・晩期—』関西縄文文化研究会
- 鈴木道之助1983「3石器Ⅱ 石鏃」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 山東町史編纂委員会1990『山東町史 別編』1991『山東町史 本編』山東町
- 高橋順之ほか1998『起し又遺跡発掘調査報告書Ⅱ』伊吹町教育委員会
- 田中勝弘ほか1986『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 土谷崇夫2003「関西の縄文前・中期における石鏃の地域性について—主に数量と大きさからの考察—」『縄文時代の石器Ⅱ—関西の縄文前・中期—』関西縄文文化研究会
- 中井 均ほか1986『磯山城遺跡—琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査—』米原町教育委員会
- 林 博通ほか1998『ふるさと浅井歴史・文化再発見 醍醐遺跡』浅井町



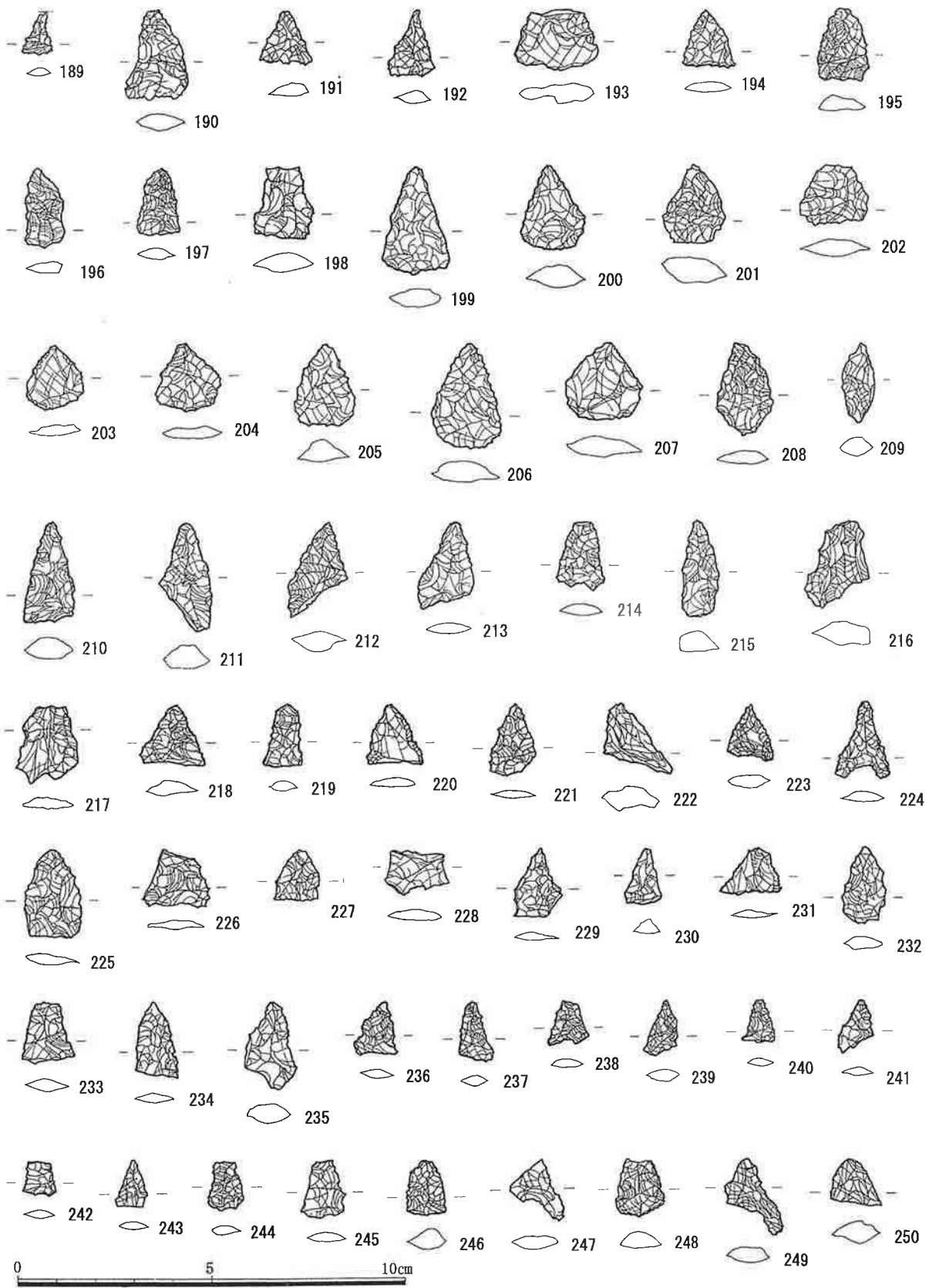
第8图 石器实测图1



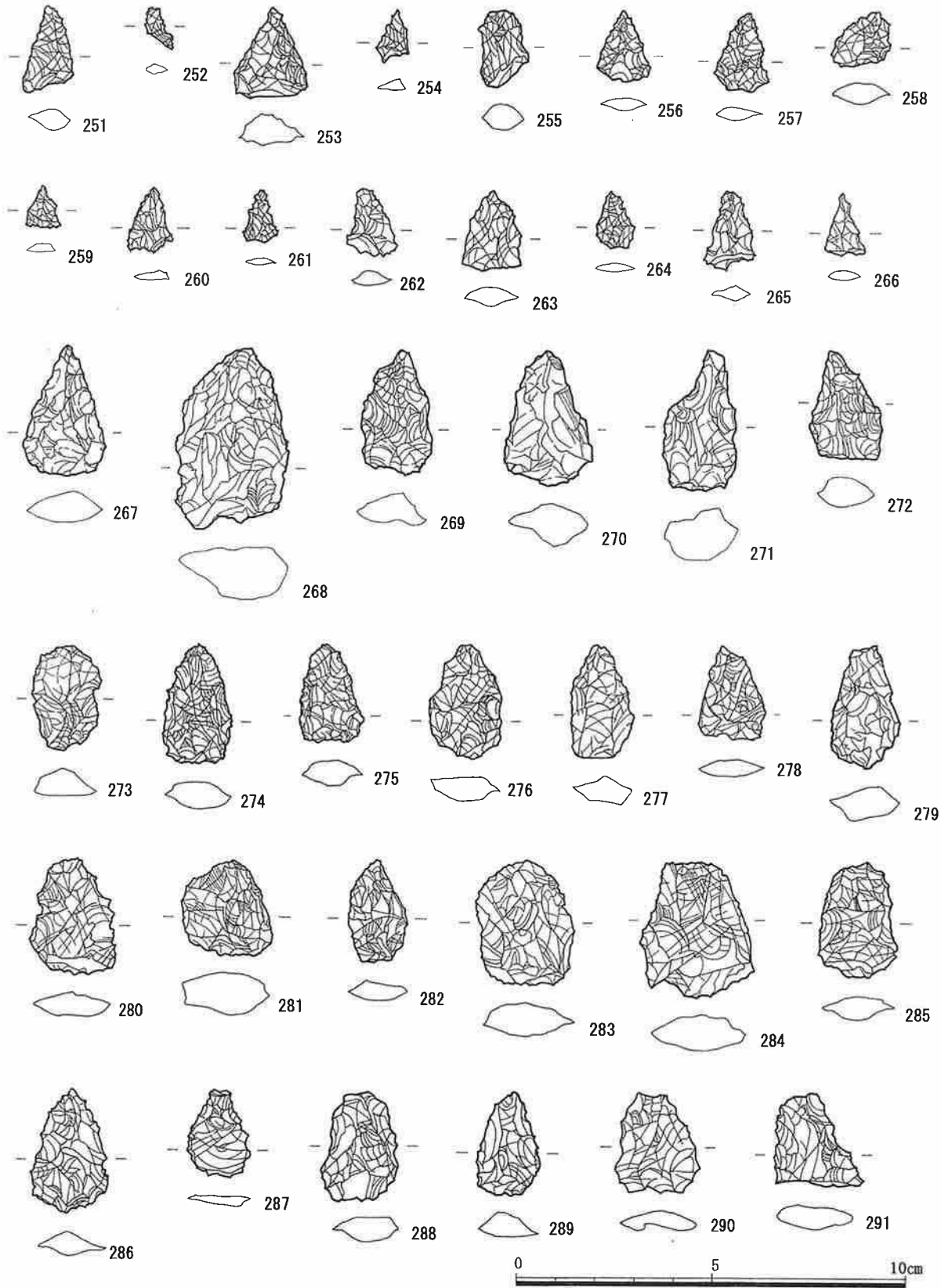
第9图 石器实测图2



第10图 石器实测图2

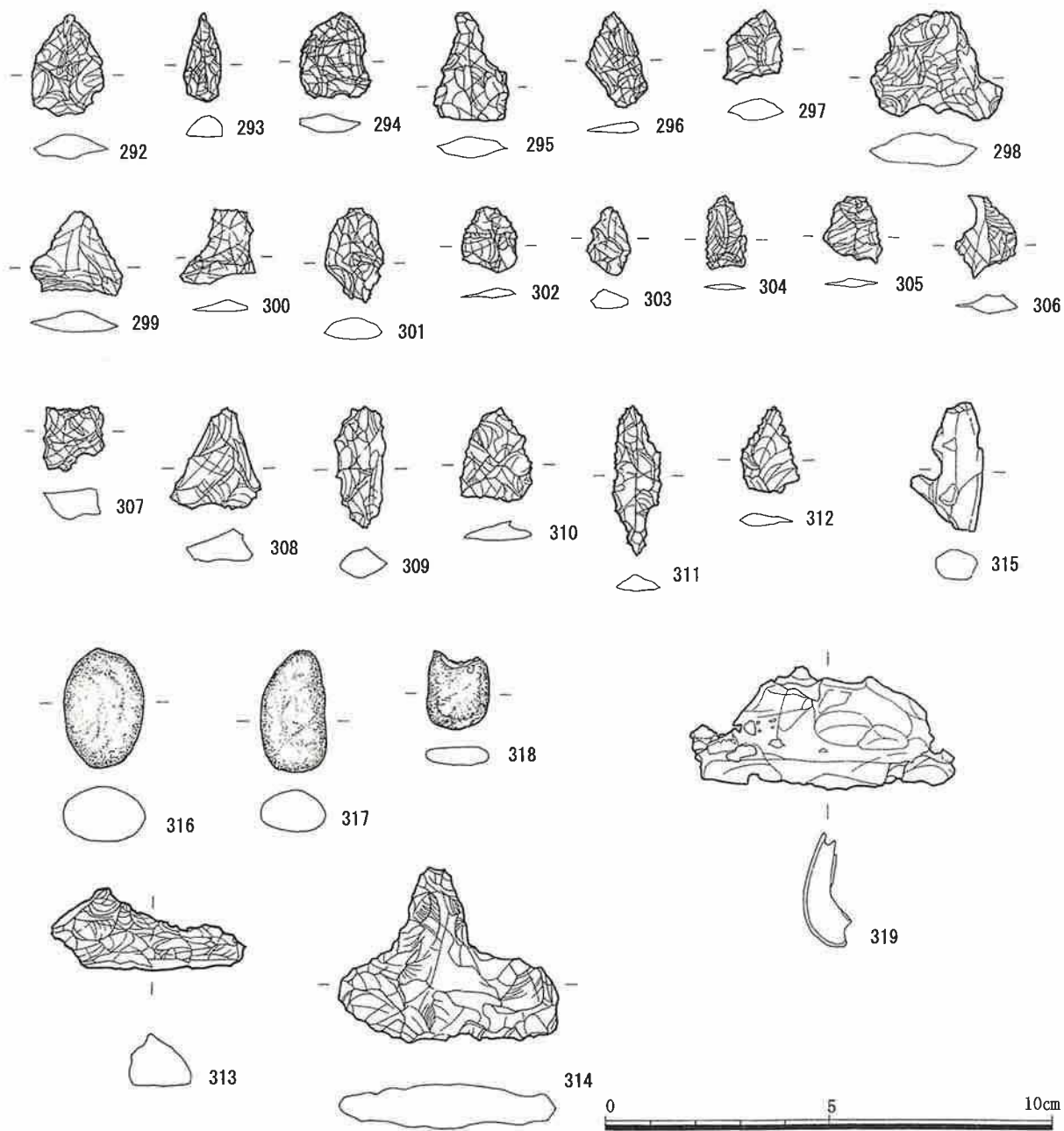


第11图 石器实测图4

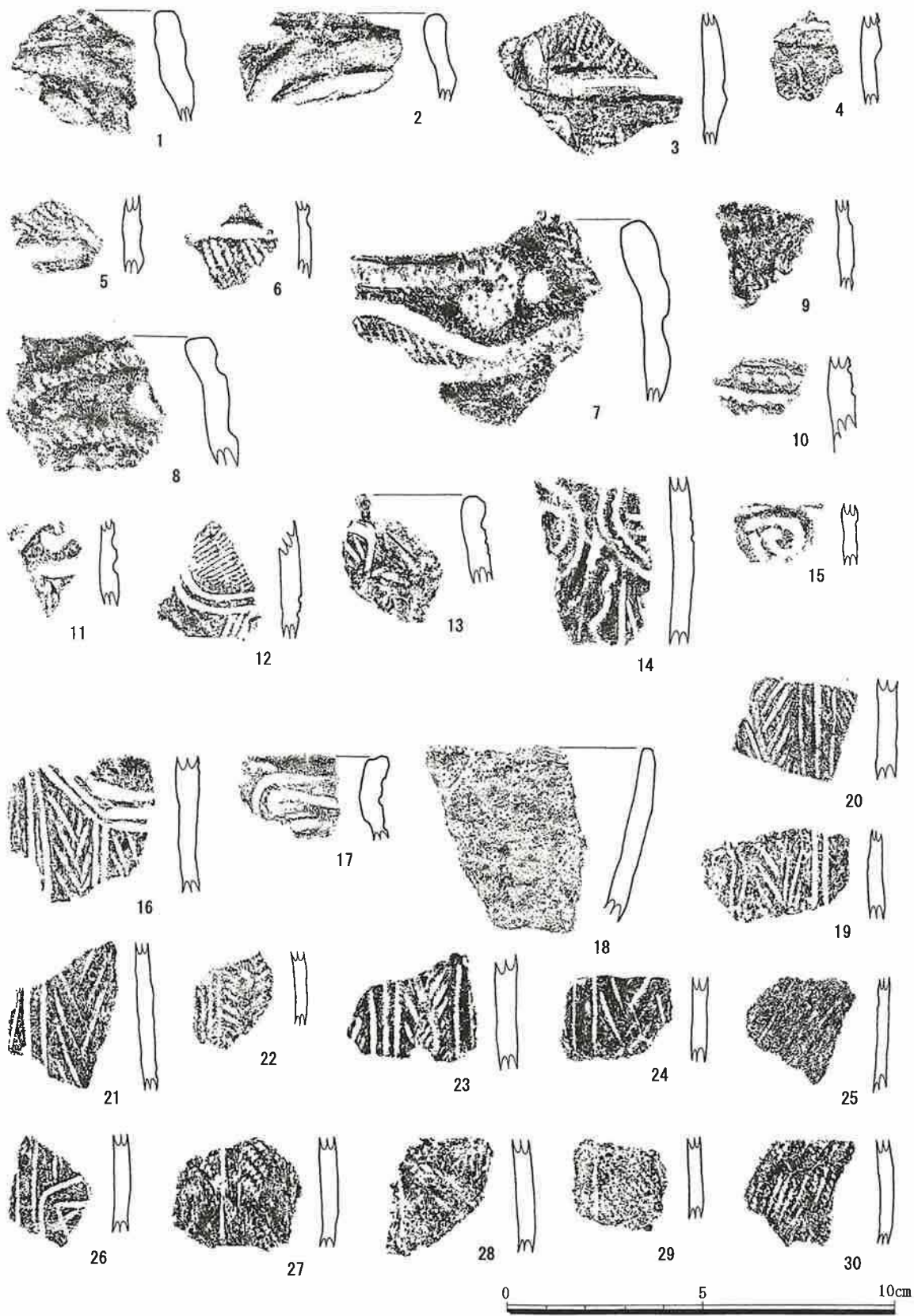


第12图 石器实测图 5





第13図 石器・その他実測図



第14图 土器实测图

# 図 版



番の面遺跡 遠景(東から)



番の面遺跡 遠景(西から)



遺跡直下の旧中山道（左の林の中）



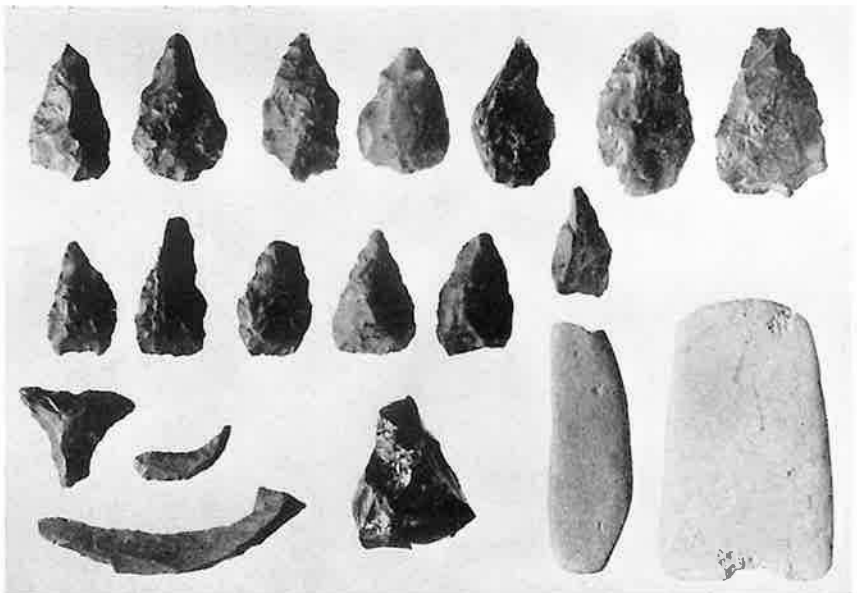
番の面遺跡の現状



竪穴住居跡(昭和30年)



発見石器(昭和30年)



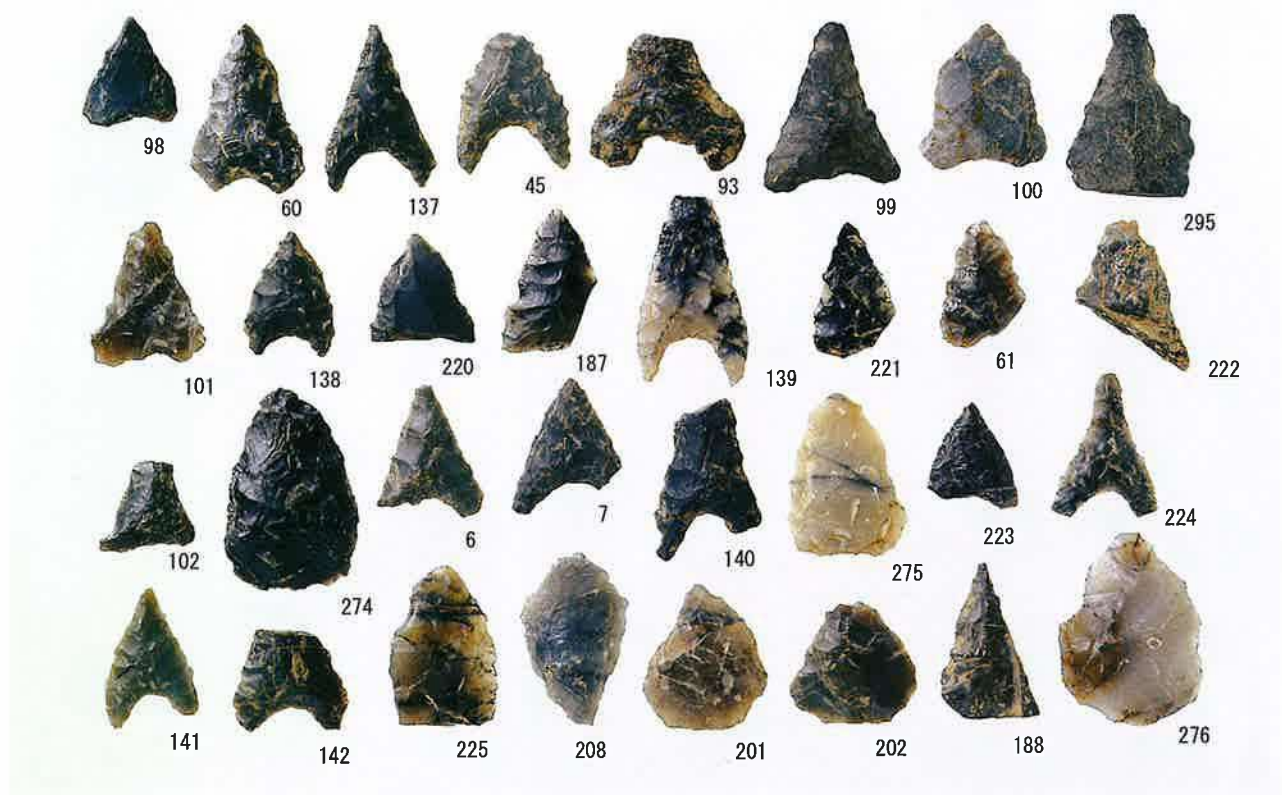
発見石器(昭和30年)



石器 1 (石器は原寸大)



石器 2



石器 3



石器 4





石器 5



石器 6



石器 7



石器 8



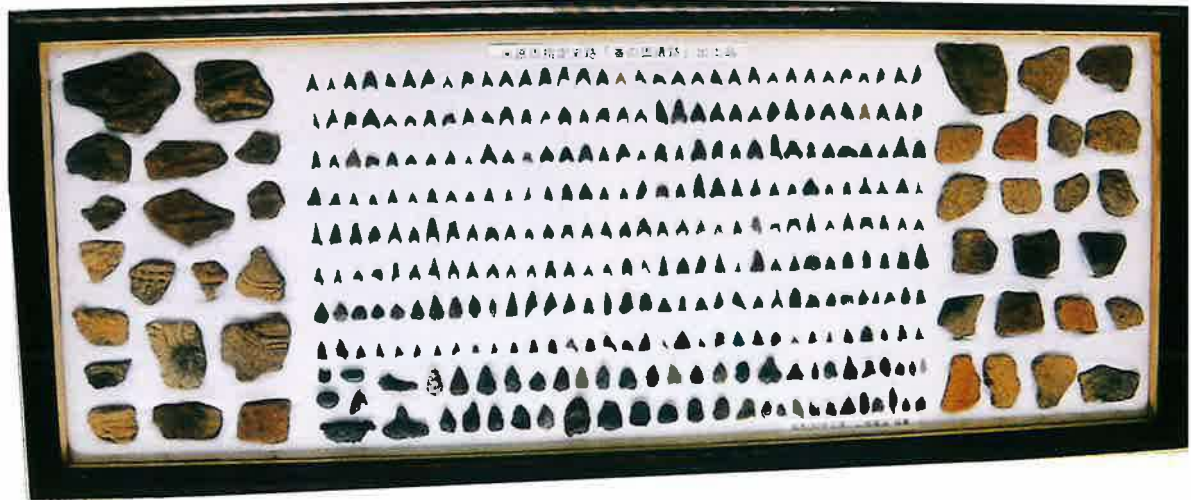
石器 9



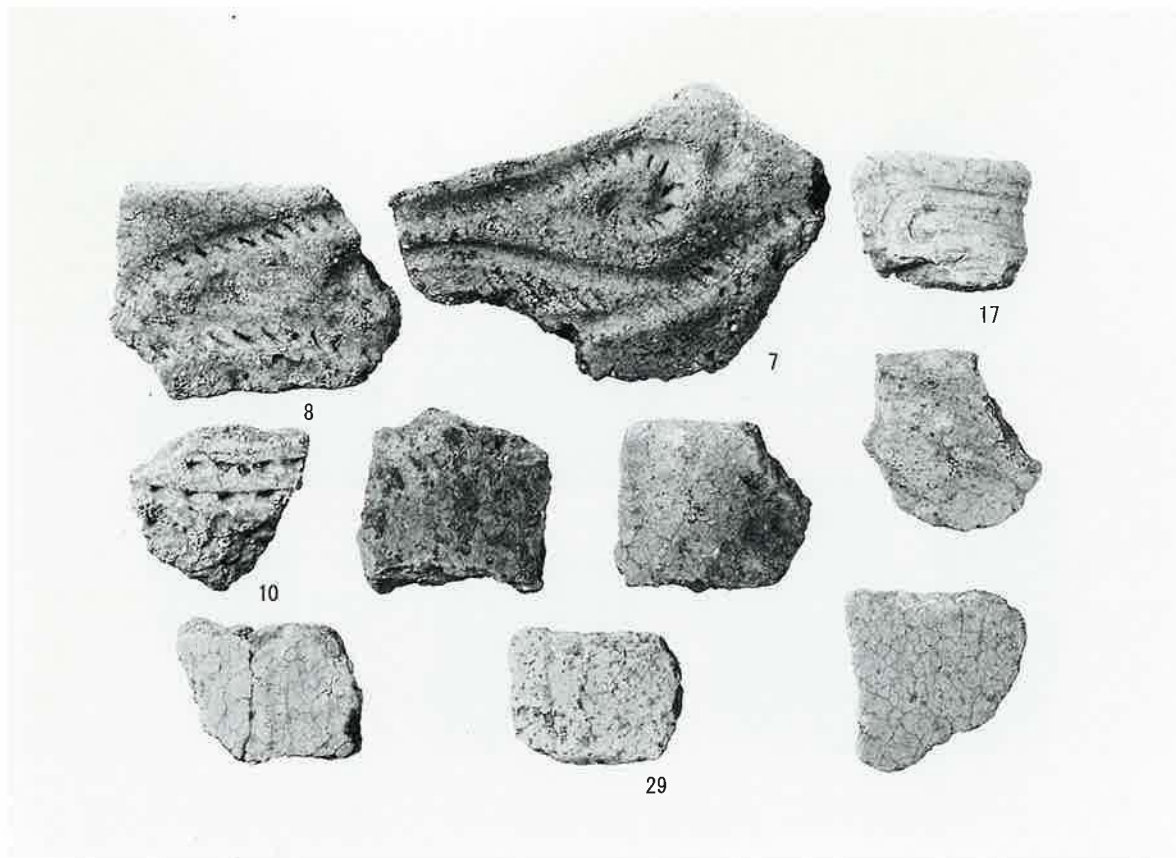
石器10



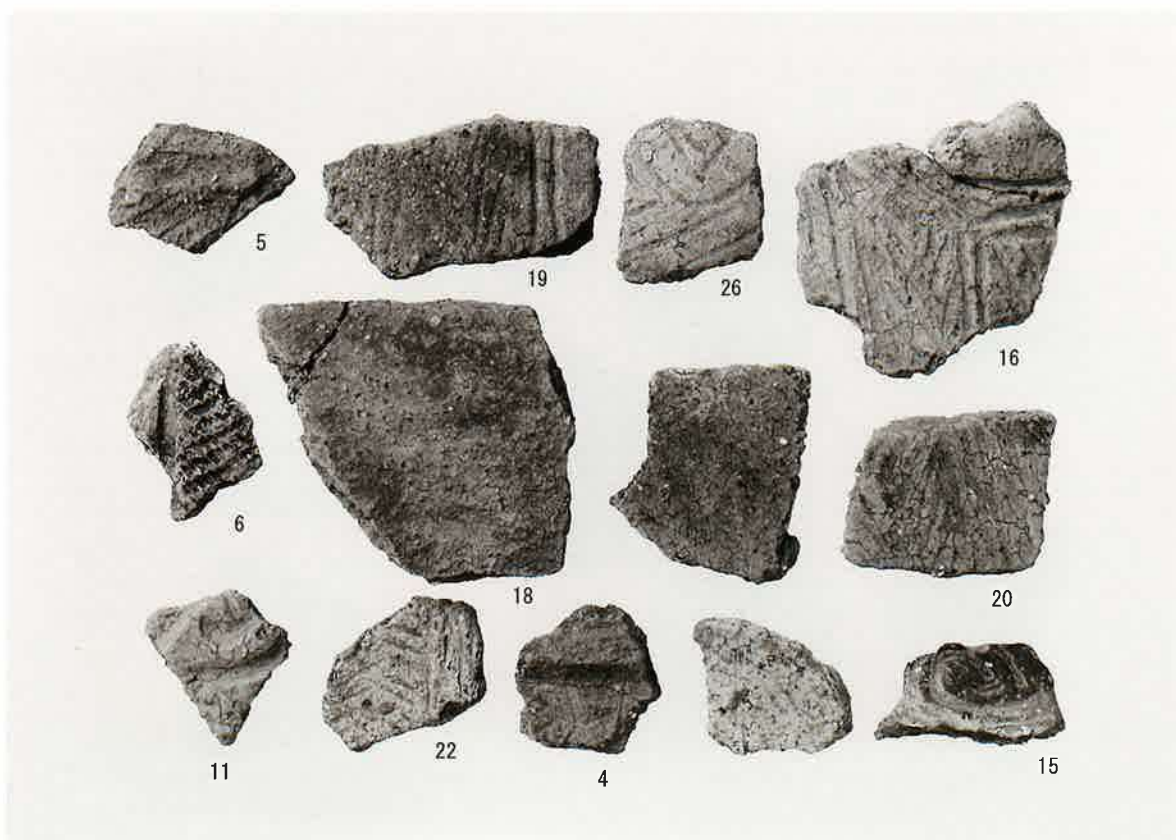
石器・その他



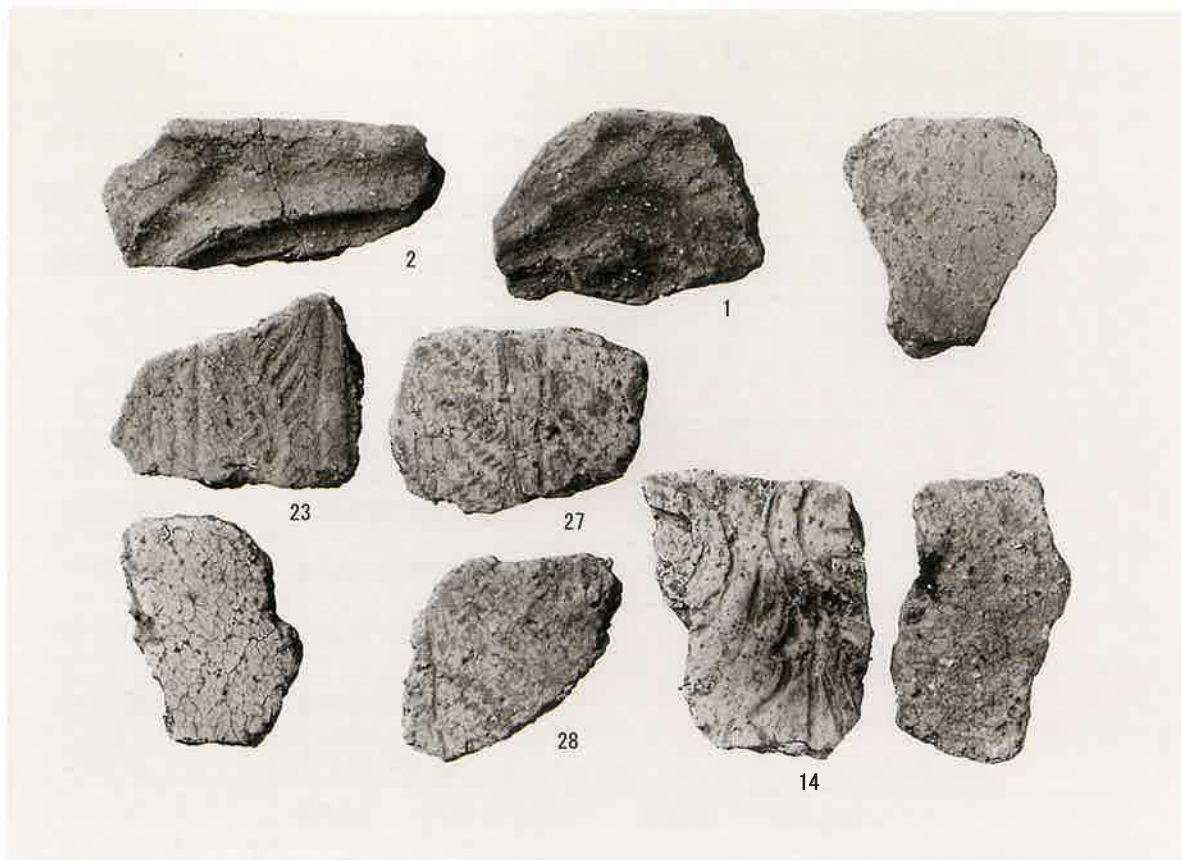
保管状況



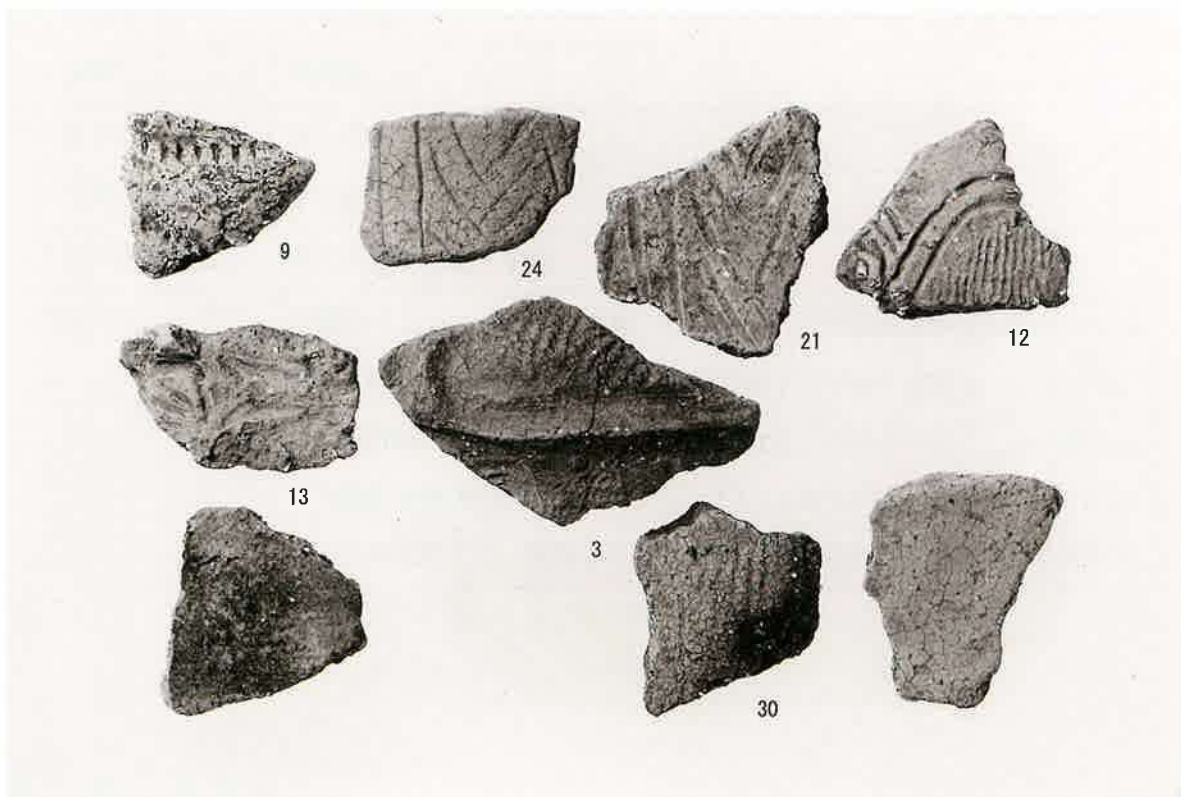
土器 1



土器 2



土器 3



土器 4

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ばんのおもていせきぶんぶちょうさほうこくしょ
書名	番の面遺跡分布調査報告書
副書名	縄文時代中期の表採遺物
シリーズ名	米原市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	3
編著者名	高橋順之
編集機関	米原市教育委員会
所在地	滋賀県米原市長岡1206番地
発行年月日	平成20年3月31日
ふりがな 所収遺跡名	ばんのおもていせき 番の面遺跡
ふりがな 所在地	あずさかわち かしわばら 梓河内・柏原
コード	市町村 252140 遺跡No. 461-134
北緯	35° 20' 00"
東経	136° 22' 52"
調査期間	平成18年6月～平成20年3月
調査面積	—
調査原因	分布調査
種別	集落跡
主な時代	縄文時代
主な遺構	なし
主な遺物	縄文土器・石鏃・石匙
特記	<p>米原市指定史跡「番の面遺跡」において、土地所有者が昭和30年より採集し、保管されてきた縄文時代中期に属する遺物の調査をおこなった。</p> <p>この遺跡は、良質のチャート産出地に近く、石鏃を中心とした石器生産と、周辺の遺跡への供給をおこなっていた遺跡としてとらえられており、今回の調査により、製作されていた石鏃の特徴を把握することができた。</p>

米原市埋蔵文化財調査報告書第3集  
番の面遺跡分布調査報告書  
—縄文時代中期の表採遺物—

平成20年3月31日

発行 米原市教育委員会

〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地

TEL0749-55-8106・FAX0749-55-4040

印刷 立木印刷

〒521-0035 滋賀県米原市醒井478-1

TEL0749-54-2662・FAX0749-54-2923